

教職大学院 Newsletter

No. 185

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.7.26(公開版)

教員養成の現場から

福井大学大学院連合教職開発研究科 副研究科長

富山国際大学子ども育成学部 学部長・教授

松山 友之

はじめに

富山国際大学子ども育成学部につきまして、少し紹介させていただきます。

2009年に学部を開き、教育・保育・福祉の人材育成と研究を中心に教育と福祉の協働・融合を特色として取り組んでいます。昨年度までで1,067名の卒業生を送り出しました。その内、約300名が富山県を中心に小学校教員として勤務しています。小さな地方の私立大学ですが、教員養成に関しては地道な努力を積み重ね、地域に貢献していると自負しております。手前味噌ですが、富山県内では、小学校の新規採用教員の4人に1人が本学部の卒業生となりました。何よりも離職者が大変少ない状況が続いていることを嬉しく思っております。

そこで「教員養成の現場から」と題して、取り組んできたことや現在直面している問題などについて、少しお話させていただきたいと思います。

ここ数年の取り組みから

ここ数年、本学部の教職課程では、中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について(令和3年12月文部科学省)を受けて、教職課程の改善を通して、「新たな教

師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成に対応できる教員養成に向かって、取り組んできました。

一例をあげれば、現場経験のある優秀なスタッフが理論と実践の往還を心がけ、内容の濃い授業を展開しています。現場でのケーススタディや学生同士の討論などを積極的に取り入れ、学生が主体的に取り組める授業を心がけています。また、学生は1年次から学外活動として、富山県教育委員会の理科観察実験アシスタントなどの事業に積極的に参加し、学校現場での活動を通して、児童生徒に実際に触れ、先生方と共に活動することで教職への理解が自然と深まるようにしています。

学部の教員養成の基本コンセプトは、「教員採用試験に合格する」から「現場に適応力のある教員」へ変化し、今は「現場で活躍できる教員へ」となっています。

内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(4)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(18)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(22)
月間合同カンファレンス報告	(27)
連合教職大学院 近況報告	(35)
お知らせ	(45)

す。イメージとしては、新採として赴任した学校で、子供と楽しく授業を行い、先輩教員と良好な人間関係を結び、校務分掌や研修研究に進んで参加できる資質・能力を身に付けた教員養成を行うということになります。簡単に言えば、4月1日から担任として主体的に動ける教員になるということでしょうか。

その実現のために、私たちなりに学部の体制を整え、取り組んできました。その結果、授業等では学生の高い評価が得られ、学校現場や地域社会からも高い信頼を得ることができるようになりました。

学校現場の状況から

しかしながら、学校現場の状況は改善したとはいえ、新採教員にとって簡単なものではないようです。校長先生方とお話していても「教員不足」は深刻で、講師の確保ができないという声もありました。また、病休の担任の代わりに教務主任が務め、教頭先生も授業に出ていて職員室に誰もいない時間があるとも聞きました。若手教員が急速に増え、ベテランからの伝承といったことも容易にできないという悩みもありました。予想できたことですが、若手教員はこれから産休・育休を取得する年代となります。昔のように現場で新採教員をじっくり育てる余裕はないというのが現状ではないでしょうか。

そのためにも大学では教職課程の学びの質を高め、学校現場で即戦力とは言えないまでも、実践力のある新採教員の養成が必要となってきたように思います。ただこれまで15回の授業の質を高める努力を続けてきたことを思うとできることは限られていると感じています。大変辛いところです。

教員採用試験の早期化・複数回実施

また、ここ1~2年の教員採用試験の早期化・複数回実施は、本学の学生の様子を見ていても非常に厳しい状況を作っていると言えます。確かに一般就職との競合や大都市圏の教員不足の深刻さを考えれば仕方のないことと言えそうな気もしますが、教職課程の仕組みからすれば、短期間に見直しや改編ができないことはご存じのことと思います。

簡単に申し上げれば、教養科目を中心に学んでいる大学2年生に、ある程度教員になるという意味を明確にさせて教員採用試験に挑戦させよというわけです。大学4年生までじっくりと時間をかけて教員養成を行ってきた私たちからすれば、数年で体制を整えるように暗に要請されたわけで、これは大変な作業です。それぞれの科目には開講年度があり、前倒しするには、その年に2つの学年が重なるなど大変です。教職課程のグランドデザインを作り、カリキュラムツリーを基に体系的に整理されたものを見直さなければなりません。大学は、学生が卒業するまでカリキュラムを残さなければなりませんので科目担当の教員の確保も含め、相当時間をかけて丁寧に取り組まなければなりません。当然、大学の教員の負担も大きくなります。

教育実習から学校体験活動へ

特に教育実習が一番大変です。4年次に教育実習という大学も多いと思います。本学は3年次で3週間実施しております。当面問題は少ないと考えておりましたが、富山県の場合3年次の7月に1次試験があり、9月に教育実習となります。教育実習の前に教員採用試験の1次試験を受けることとなります。

学生からは、心が決まっていない状況での不安、チャンスが2回になったとはいえ、不合格では教員になることを否定された気持ちになるという声も聞かれました。

文部科学省の対応も急で、学校体験活動を早期から実施するようにし、教職課程の学生が大学3年後期か4年前期に学校現場で行う現在の教育実習を取りやめ、学校体験活動の活用を通じて、学生が学校現場での教育実践を段階的に経験する方向性を打ち出しました。本学部では、先程も述べましたが、1年次から学外活動を奨励してきましたので、学校体験活動を取り入れることは比較的容易だとは思いますが、短期間で仕組みを整えることは至難の業です。

特に私は教育実習の意味について思うことがあります。学校現場の教員をされている方の多くは、教育実習で教員になるという思いを強くされたのではな

いでしょうか。教職を志し、大学の教職課程で教育原理や教科教育法で教育と授業の方法を学び、何となくできそうだと思います教育実習に臨む。ところが教育実習では指導案ができずに悩み、これで大丈夫と思った公開授業は指導案通りに進まず失敗し、落ち込んでいると子供たちが「先生楽しかったよ。」と慰めてくれるといった経験をお持ちではないでしょうか。この子供たちとの出会いを通し、今までの教職に対する価値観を見直し、教育の面白さ、奥深さを学ぶことで教員になるという思いがさらに強くなったのではないのでしょうか。教育実習の大切さはそこにあり、ただ学校現場に行けばよいというものではないと思います。

私はこのような思いや経験を大学時代にもつこと、教職課程の中で経験することをどんなに社会情勢が厳しくなろうとも大切にしたいと思います。

私が大切にしたいこと

先日、教え子の学級を訪問した際の一コマです。2年生の生活科で育てているミニトマトについて子供たちが話し合っていました。目の前の男子が「ミニトマトがたくさんできると幸せもたくさんになるのかな」と横の女子に話していました。「そうかもしれないね」と答えて2人で納得していました。何とも微笑ましく、3年目の教員ですが、周囲の先生方から温かく見守られ、着実に実践力を身に付け、子供たちにこんな会話が生まれる温かい学級を作っていることに安心するとともに、「教員って素晴らしい仕事だなあ」と感じました。

教職は、子供と正面から向き合う創造的な仕事です。その実践のためには、時間をかけて子供と触れ合い、子供の思いや願いを肌で感じ、子供の心の動きを

自分のことのように思い浮かべる力が必要であると私は考えています。それは一朝一夕にできるものではありません。大学と現場をしっかりとつなぎ、変化の激しい教育の世界であっても、慌てることなくしっかりと本質を見極め、丁寧に準備して、正しく子供と向き合える教員養成を心がけることが今求められており、私自身大切にしていきたいと思います。

おわりに

6月の入学説明会の後で、ある高校生が「前に先生のお話を聞いて、どうしても先生になりたいくなりました。どうしたらなれますか？」とお母さんと相談に来られました。本当に嬉しかった。

今、社会では、教員が多様な子供たちを相手に教え、しかも保護者対応もしなければならない。勤務時間も長くブラックであるというネガティブな報道が多く、教職を敬遠する雰囲気が存在すると思います。しかしながら「子供たちに何かできることをしたい」「子供に何かを教えたい」という思いは人の心の中に必ずあり、困難であっても「先生になりたい」という思いをもつ若者はいるということをその高校生に教えてもらった気がしました。

そんな教員を夢見る高校生や学生のみなさんの心に火を灯し、熱い思いで教職を学ぶことをしっかりと支え、全力で応援していかなければなりません。これからも情熱のある若い教員が育つ教職課程の創造と実践に微力ですが取り組んで参りたいと思います。ぜひ、多くのみなさまからも教えていただきたいと思っています。よろしく願いいたします。



院生自己紹介

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立福井商業高等学校

石田 洋志 (いしだ ひろし)

約30年前、福井大学教育学部小学校教員養成課程を卒業し、県立高校での英語科教諭としてのキャリアを始めた。その当時は自分が後に大学院生として再び福井大学に戻ってくるとは夢にも思わなかった。

3校目となる現任校では昨年に続き8クラス308名の生徒からなる学年の主任を務め、日々貴重な実践を積み重ねることができている。本校での勤務が10年を越えいつの間にか、いわゆる“長い先生・古い先生”と認識されるようになってきた。自分が意識しなくとも、周囲の先生からの自分に対する見方も変わってきて、また校内でのあらゆる場において発言力や影響力も大きくなってきた。それを周囲はベテラン先生と呼ぶのだと思うが、私としては未だに知らないこと・わからないこと・できないことが多くてもどかしい気持ちや恥ずかしい気持ちでいっぱいである。そんな私が本学教職大学院での学びを志したのは、学び直しの機会を求めた自発的な動機によるものであった。

学校の先生の仕事って何だろうか。いつごろからこのように考えるようになったのかはわからないが、経験を積み重ねることによっていろいろなことがわかり始める一方で自己の将来を考えた時に果たしてこのままでいいのだろうか、という漠然とした不安に襲われたことを思い出す。自分は毎日しっかりと「先生」の仕事ができているだろうか。自分が関わっている生徒に対しどのようなことができているだろうか。正解はないと思うが、もっとできること、あるいはやるべきことがあるように思えてならない。

教育学部の学生として過ごしたあの頃、何の根拠もないまま、ただただ理想の教師像について仲間と話す時間が本当に楽しかった。英語科の研究室で夜遅くまで夢を語り、早く卒業して子供たちの前に立

つ日を待ち望んでいた。今ほど情報がない中で、教育に関わる研修や行事にはできる限り参加した。そこで出会った先生方のいろいろなお話を聞くことが本当に楽しかったし、またうらやましい気持ちで先生たちを眺めていた。いつしか時が流れ、教員としての経験値が増えるのに反比例する形で自分の中の純粋に学ぼうとする気持ちや意欲、あるいは新鮮な気持ちが少しずつ薄れていくのを感じていた。学校という組織の中にと、またあえて限定して本校のような歴史と伝統ある学校に勤務していると、どうしても周りのことが見えなくなってくる。自分にとってあたりまえのことが学校の外ではどうだろうか？果たしてこの考え方は一般社会では、あるいは他校では通用するのか？そもそもこのように自分は思っているが、本校の他の先生方はどのように考えているのだろうか？そのようなことを考えながら参加した研修は、実に多くの学びを与えてくれた。感謝の気持ちでいっぱいである。そしてここで自分が得た学びとその時に自分の心が揺れ動いた情動をぜひとも本校の先生方と共有したいと痛切に思った。

本校での私の実践は、“これまで福商として取り組んで来なかったことを始めたい！”という思いを大事にして様々なことに着手してきた。他校ではよく耳にする教科横断型授業の展開、お互いの授業を見合う研究会など、まだまだ立派なものと言えるものではないが、理解を示してくださる先生方と協働して取り組むことができとても興味深かった。また主任を務める学年会のコミュニティの活性化も実践テーマの1つである。昨年度より前年踏襲からの脱却を掲げ生徒主体の学年集会など各種取り組みを行う中で、徐々に担任の先生方にも私の考えが浸透してきており、自ら積極的に関りたいと意思表示する

生徒も増えてきた。先生も生徒も含めた今後の学年会の活性化が大いに期待できとも楽しみである。

次に本校での実践の一番大きな柱である C-Net について述べてみたい。C-Net とは Communication と Network の造語である。本校の先生方が円滑なコミュニケーションを図りながら強固なネットワークを作り、同じ志を持って協働することで本校生を正しく導くコミュニティを形成していくことを目指し、私が勝手に命名したものである。まずは本校生の課題等について現状を把握するために先生方にアンケートの回答を依頼し、このアンケート結果を踏まえながら C-Net でどのような内容を検討していくかの案を考えた。年間を通して継続的な開催となるようにして、ここでの話し合いをもとに先生方の生徒に対する思いが同じベクトルを向くようになっていくといいと考えている。これまで5月6月と2回開催し参加者はどちらも10名に満たなかったが開催の意義は大きく感じている。本校の先生方の中で自分は長く本校で勤めてきた先生の1人であり年齢的にも上の先生方と連携が取りやすい。加えて若い先生の新しいことに挑戦したい気持ちや、勤務年数の浅い先生方の疑問や悩みにも応じやすい（・・・と自負している！?）。自分としてはこの立場をうまく利用して、全先生方の理解と共感を得ながら C-Net の活動をより円滑に進めていきたいと考えている。

研修を通して、教育に関する新たな知見に触れ、また他校の先生方の取り組みを知る機会を持つことができ、毎回本当に新しい刺激をいただいている。自分がいかに無知だったか、また学ぼうとしてこなかったかに気づかされ、改めて新鮮な気持ちで授業の展開や生徒との向き合い方・導き方について学んでいる。また大学院で出会う先生方は本当に幅が広く

年齢はもちろん校種も違えば経歴も違い、当然課題としてとらえていることも皆それぞれに違う。だからこそ他の先生方の取り組みはとても興味深く、また自分に置き換えて考えることができることも貴重な機会となっている。先生方との語りを通してどの先生も目の前の児童生徒に対して必死に向き合っていることがわかり、共感できる部分が多い。またどんなに経験のある先生でも日々模索しながらより良いものを目指してご自身が成長したいという思いをお持ちで、その純粋な姿勢には本当に感心させられる。そしてその先生たちが放つエネルギーに大きな勇気をもたらしている自分がある。今後も同志としての多くの先生方との出会いを大切にしていきたい。

最後に1つ…「世の中の非常識になるな。」これは私の父からの言葉である。大学の卒業式を終え、数日後に念願の教員として生徒たちの前に立つことにわくわくしている私に、何気なく父が言った言葉だ。今となっては父の真意はわからないし、建設業に長く勤め教職の現場を知るはずもない父が何を思って自分に言ったのかはもはや想像するしかない。教員は良くも悪くも自分の城があり、なかなか他の介入を良しとしない風潮がある。また児童生徒は弱者であり、大人である教員はいかようにも権力を使うこともできてしまう。だからこそ教員は常に自分を顧みて、そして謙虚でかつ真摯な態度で学び続けたいいけない。世の中の流れを敏感に感じ取り、柔軟に対応できる力を備えなくてはいけない。私は今後も生徒たちの前に立ち続け、精一杯「先生」を務めていきたいと思っている。目の前の生徒に全力で向き合いながら、時に父の言葉をかみしめる時間を大切にしていきたい。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/坂井市立長畝小学校

川崎 美和 (かわさき みわ)

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコース1年履修生として学んでおります川崎美和と申します。所属は、豊かな緑

に囲まれ、歴史ある丸岡城の近くに位置する坂井市立長畝小学校です。教務主任1年目で、初めて担任

を離れて、主に学校運営に関わる仕事に取り組んでいます。

専門は英語です。もともとは英語が好きで教師を目指し、初任校は中学校でした。好きな英語を教えることは私の楽しみであり、子どもに英語を楽しいと思ってもらえるような授業づくりに力を入れて取り組んできました。その後、小学校に英語教育が導入されるタイミングで小学校へ異動しました。小学生だからこそ聞く力や話す力の吸収が早く、小学生ならではの外国語教育の在り方に興味をもって取り組んできました。教育総合研究所で2年間、小学校英語の研究者として、英語教育の研究に携わる経験ができ、そのとき初めて理論と実践を往還する研究の奥深さに気づくことができましたと感じています。

そんな私が組織マネジメントに興味をもち、教職大学院で学ぶことになったきっかけは、自分の経験不足、知識不足を実感したことにあります。これまで、よりよい学級経営や授業改善を目標に、自分なりに必死に努力してきたつもりでした。しかし、そのように自分中心の研究や実践をのびのびとしてこられたのは、周りの先生方、管理職の方のあたたかい支援や理解があったからこそであったと気づきました。これまで、どんな困難に直面しても周りの方に守られ、助けられ、励まされてきました。自信のない実践でも、褒めてもらい、助言をいただき、伸ばしてもらってきました。しかし、いざ自分が学校組織の中で年齢的に上になり、逆の立場に立たされると、自分が周りの先生方のために何もできないことに気づきました。困っている先生がいても、自分に自信がなく、的確な助言をしたり、組織に働きかけたりすることができませんでした。情けなく思いました。私はこれまで本当に魅力的な諸先輩方、管理職の先生方に恵まれてきたと思います。たくさんの知識をもち、多くの先生方を笑顔で元気に、のびのびと教育活動に取り組めるように導いてくださる、そして、時にしっかりと舵をきって、教職員が一体となって前進できるようにしてくださる心強い存在でした。感謝と共に、いつか私

はその御恩を回りの先生方に返していける存在になりたいと思っています。憧れの先生方にはまだ程遠い存在ですが、自分の中で最強のロールモデルがいることが私の自慢です。まずは、組織マネジメントについて学ぶことが大事だと考え、教職大学院で学ぶことを決意しました。

昨年度、事前履修として初めて教職大学院での学びをスタートした時のことが忘れられません。知識や経験が浅い自分が大学院に来て組織マネジメントを学ぶなんて大丈夫なのだろうかという不安しかありませんでした。大学院の先生方も受講に来ている先生方も立派に見えて、そのような中で、自分の自信のない実践や考えを語ることから始まりました。これまでの研修とは違い、何も教えてくれない、語り聴き合うことが中心の学びで戸惑いましたが、回を重ねるごとに、とてもこの学びの心地よさを感じるようになりました。自分は語ることや、聴いてもらうこと、そして様々な校種や年齢の違う先生方との対話を通して自分の考えを拓き深めていくことがこんなに好きなのだ気づきました。未熟な自分をさらけ出しても、否定されることのない安心感。また、否定されるのでもなく褒められるのでもなく、ただ、考えるきっかけを次々といただき、自分が届かなかった考えにまで手が伸びていき、あっという間に時間が過ぎていきます。年齢や校種の違いを問わず、様々な先生方の実践や考えを聴くことで得る学びはとても大きいと感じます。特にストレートマスターの若い先生方の考えや、幼稚園の先生方の考えを聴くことは新鮮であり、斬新であり、驚きや発見ばかりでした。

今の私の実践のテーマは「must から will へ」です。子どもたち、教職員がいきいきと主体的に学ぶコミュニティになっていくような組織づくりについて研究をしていきたいと思っています。しかし、慣れない教務主任の立場で、組織に大きく働きかけていくことの難しさを感じています。様々な課題に直面していますが、何か小さな1歩でも、確実な1歩を、この1年で残していきたいと思っています。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/おおい町立本郷小学校

栗原 宗則 (くりはら むねのり)

学校改革マネジメントコース1年履修生の栗原宗則と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私には、楽しみながら取り組んでいることがあります。それは、DIYです。私のチャレンジにお付き合いください。

昨年の猛暑で、家の2階が暑いという課題が明らかになりました。仕事を終えて家に帰ると灼熱の2階、エアコンをかけなければ、夜になっても熱が逃げず寝られる状態ではありませんでした。その解決策を探るため、屋根裏へ上がってみました。すると、そこはサウナのような空間でした。息をすることさえ苦しく感じられました。なんとかしなくては…。解決方法を探す日々が続きました。インターネットで調べたり工務店に問い合わせたりホームセンターを巡ったりするなかで、屋根裏の熱が2階の部屋へ下りてこないように断熱材の量を増やしてみてもどうかという道筋が見えてきました。すでに敷いてある断熱材にプラスするという方法です。しかし、さらに調べていくと、断熱材を重ねると湿気が抜けにくくなり、カビの原因になるということがわかり断念しました。一方で、天井の板が重なる部分の隙間や壁との境目を気密テープでふさぐことで屋根裏の熱が2階の部屋に侵入することを防ぐことができるということがわかり、早速とりかかりました。家族のためにすこしでも…という思いで、出勤前の朝の早い時間にライトを持って屋根裏へ上がりました。太陽が登ると温度が上がるので、その時間しか作業ができないのです。それでも作業を終えると汗だくで、シャワーを浴びてから出勤する日々が続きました。結果は、2階の室温に大きな変化はありませんでした。ショックでした。しかし、そこからわかったことがありました。屋根裏の温度を上げないようにすることを考えるということです。YouTubeを見ると、大きく2つの方法が見つかりました。1つ目は焼けた瓦の熱が屋根裏へ入ってこないように屋根の斜めになっているところへ断熱材を施工する方法。2つ目は、屋根裏の空気を

換気扇で外へ出して温度を上げないようにする方法です。私は2つ目を採用することにしました。

まず、屋根裏の容積を計算し、それに見合った換気量を持つ換気扇を注文しました。換気扇を選ぶ際、出入り口を通る大きさであることも重要でした。屋根裏は足場が悪く作業がしにくいので、できるだけ下で作業をしてから上げるようにしました。約8kgある換気扇を屋根裏に設置するのは大変でした。次は電気工事です。電気の配線は電気工事士の資格がないとできないということがわかり、近所の電気屋さんに依頼しました。その配線の仕方にも2つの方法で頭を悩ませました。1つ目は温度センサーを付けて35℃を越えたら自動でスイッチが入るようにする。2つ目は2階にスイッチを付けて必要な時だけ動かすということでした。私は最初、1つ目を選択して取り付けを行いました。しかし、数日間考え続け、2つ目の方法へ変更することにしました。労力もお金もかかりましたが、より便利で快適で実生活に合った方法を模索した結果です。

次は、空気を通すダクトを取り付けます。ホームセンターには、アルミのフレキシブルダクトとストレートダクトが売られていました。それらを組み合わせて通気口を作ります。外の雨が入ってこないように中を高く外へ向かうにつれて低くなるように勾配を付けます。吊り下げる針金は錆びにくいステンレスの物を使用しました。

最後は壁に穴を開ける作業です。ドリルを使って、直径150mmの穴を開けます。耐震壁でないことを確認し、できるだけぴったりの穴を開けます。とても勇気のいる作業でした。換気扇のフードをはめるときは、水や虫が入らないように、ビス止めをした後にコーキングをしました。高所の作業は、ヘルメットと命綱を使用しました。

今年も夏がやってきました。しかし、昨年とは違います。40℃の猛暑日でも問題はありません。換気扇

のスイッチを入れるたびに、達成感を感じます。自分を褒めてあげることができます。家族が快適に過ごしています。

Society5.0の社会を前に、これまで以上に人間の知恵や創造力、判断力、コミュニケーション能力が求められる社会へ変化してきました。子どもたちには、より便利で快適で持続可能な社会を作り上げてほしいと願っています。そのためには、生涯にわたって学び続け、楽しみながらチャレンジすることが必要で

す。チャレンジして1つのことができると、また次の課題が明らかになります。1人で考えたりみんなで相談したり、タブレットで調べたり、本物を見たりします。まるで学校の授業のようです。

私は、子どもと創る授業が大好きです。どの子ども新しいことを知ると楽しい、わかると嬉しい、できると自信になります。日々の授業の中で、学びを楽しみ、ワクワクしながら大人になって、将来、自分に誇れる仕事ができる大人へ成長してほしいと願っています。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/勝山市立成器南小学校

齋藤 英市 (さいとう えいち)

勤務している勝山市立成器南小学校は、母校です。そして、我が子3人もお世話になった学校であるので私にとってみると、とても感慨深い学校です。とはいっても、「昔勉強していた教室は違う学年の教室になったなあ」とか、「6年生のとき、親子行事で学校でお泊りして肝試しとかしたなあ」「昔はここにこぶ山があったよなあ」とかしみじみ思い出しているヒマも、水分をとっているヒマもないくらい超絶に忙しいのが現状です。そして、今年度は3年生の担任。なんと、新採用で3年生を担任したとき以来26年ぶりの3年生担任に疲労困憊している日々。

これまでの教師人生を振り返ってみると、小学校勤務が12年、中学校勤務が11年、現場を離れての勤務が3年でした。思えば小学校では5、6年生の担任が多かったし、中学校ではいつも1年、2年、3年とそのまま持ち上がるパターンで過ごしてきました。その時その時は楽しくてずっと忘れたくないなあ、という瞬間もあったろうし、つらくてしんどくてもういやだな、と思う日々もあったと思うのですが、とにかく今の、この多忙な日々の、過ぎ去った日々のことを振り返ったりする余裕なんてありませんでした。ですが、教職大学院で学び始めてから、これまでのことを振り返る機会とその意義を得ることができました。

新採用で初めて小学校に赴任し、1年目から担任をさせていただきました。その時の学年が3年生でした。当時は男子20名、女子20名、計40人の学級で2クラスありました。学年全体で80名いました。当時としては、1学級の児童数は40名まででした。ですから、1クラスの人数としてはMAX状態でした。いきなりの40人を担任していた私を、一緒に組んでいた主任の先生はさぞかし不安だっただろうな…、と今なら思えます。しかしながら、子ども40人相手に若かった私は毎日がむしゃらになって日々を過ごしていたのでしょう。しかし、今は…。あの頃と違って子どもは変わったなあ…と思います。ですが、子どもが変わった、というよりも、親が変わった？いやいや、この世の中が変わったなあ、と思えます。今の私自身が子どもたちに関わろうとしている方法は、ちゃんと今の子どもたちにマッチしているのかなあ、と自問自答する時があります。「VUCAの時代」です。教職大学院で学び始めてから、これまでを振り返り、今を考えることの重要性を感じています。

昨年度のマネジメント研修をきっかけに、教職大学院で学ぶことが始まりました。「悩んだらGO!」を心にいつも置いているので、はじめは、「まあ、なんとなく」あたりから夏や冬の集中やラウンドテーブルへの参加をしました。正直、日々の仕事に更に加

えて最終的なゴールに向かって行くことに「めちゃくちゃ大変では？」と後悔するときもありました。しかし、大学院でいろいろなグループで互いの実践を語ったり、皆さんの実践から学んだり、私の歩みを振り返ったりして、多様な方々と関わり、つながっていくことは、とっても興味深く、いいなあ～と感じるようになりました。

このような機会がなければ、私の歩みや、実践を振り返ることってなかなかありません。今の私の原点がどこにあるのか、私は何を大切に、何を展開し、どこに向かっていこうとしているのか。そういったことを私自身に問うことはとても大切なことだなあ～と今、感じています。また、様々な方々と実践を共有していく中で、新たな気づきがあったり、そこから私自身の幅が広がっていったりする気がします。いろんな方とつながることが、私は好きなんだなあ、楽しいんだなあ～と改めて思うのです。

だから、教職大学院でいろんな方々と出会って、学びを深めて、私自身の幅をもっと広げたいなあ、と考えています。

今は研究主任と ESD を担当しており、教員みんなでレベルアップして学び続ける教師コミュニティを

育成し、ESD を軸にして学校全体が活性化し、学校全体が輝けるよう取り組んで行こうとしているところです。みんなそれぞれのベクトルの長さでいいから、目指すベクトルの向きを一緒にして、日々少しずつでも取り組んでいけるようにしたいとしているところ。ともに働く先生方は、みんな熱心で協力的でコミュニケーションもしっかりとれるし、風通しのよい職員室だと思っています。そして、何でも相談することができるすてきな管理職の先生方で、本当にいい職場にいるなあ～って思う日々です。そういった強みを生かして、これからの私の取り組みと、この教職大学院とともに学ぶ皆さんや先生方と語り合う中で、さらなる気づきや問いを見出したり、その問いに対する答えを見出したりして、目指すところにたどり着けるようにチャレンジして行けたら、と願っています。

まだまだ私自身も未熟で、レベルアップしていかなくはないなあ、と思っているので、この教職大学院での日々はきっとかけがえのない時間になるはず。皆さんと一緒に過ごす時間を味わいながらがんばっていきたいです。とりとめのない自己紹介になりましたが、どうぞよろしくお願ひいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県教育総合研究所

佐藤 義信 (さとう よしのぶ)

学校改革マネジメントコースの佐藤義信と申します。私は現在福井県教育総合研究所の新教育課題研究課というところで勤務しております。研究所での勤務も今年で4年目となりました。教育研究所で働いている所員はどのような仕事をしているかご存じない方もいらっしゃると思いますので、自己紹介を兼ねて、私が取り組んできた業務を紹介したいと思います。

最初の2年間は、私は研究員という立場で勤務しました。私の専門教科は英語で、これまでずっと中学校で英語の教師として勤務してきました。研究所に

来て初めて、小学校外国語の研究に従事することになりました。小学校外国語の訪問型研修や教科別研修を担当することにもなり、小学校外国語の学習指導要領を一から勉強することから始まりました。

小学校外国語の研究をすることで、小学校で育ったコミュニケーションの基礎が、英語を学習する土台となることを改めて理解することができましたし、中学校の英語科教員としてありがちな、小学校外国語に対する誤解を払しょくすることができました。

また、県学力調査(SASA)の問題作成や分析、研修動画の作成や研修講座を企画する中で、教科の資質・

能力を育むために、いかに児童・生徒の学びのストーリーを意識して授業や学習を展開していくことが大切かを学ぶことができました。この2年間は、教科の本質に真剣に向き合う大変貴重な経験となりました。

令和5年度からは行政職として、新教育課題研究課の業務に取り組むことになりました。新教育課題研究課の業務は多岐にわたりますが、特に「校内研修コンサルテーション」の業務と、所内で実施している所内研修会と協働研究会の運営を通して、「観の転換」に向き合うこととなりました。

「校内研修コンサルテーション」では、参加依頼のあった学校の校内研修の企画、授業参観や事後研究会に参加して、現場の先生方と一緒に対話を通じて学び合う経験をさせていただいています。管理職をはじめ、研究主任や研究推進部の方と対話し、課題に向き合いながら、学校としての意思決定を支援したり、対話を記録して可視化できるようにしたりしています。

「校内研修コンサルテーション」を通じて、子どもが主語となる授業や学校を作っていくには、子ども観や授業観の転換が必要であり、「観の転換」は教師

同士の対話を通じた学び合いの中で少しずつ転換が図れることを学びました。同時に、教師同士がフラットに対話をする中で学び合える環境や組織づくりも重要なことがわかりました。これらのことから、「対話を通じて学び合う集団になるためには」という問いに向き合い、現場にとってよりよい支援ができるよう学びを深めたいという思いが高まり、教職大学院への入学へのきっかけとなりました。

新教育課題研究課の業務以外にも、若手教員研修のファシリテーターを務めたり、研修会に参加し、他県の教育センター職員の方々と交流したりするなど、忙しいながらも、新しい学びがある充実した時間を過ごすことができています。どのような場面においても、明確な答えがないからこそ、学び続ける必要があることを実感しながら業務に臨んでいます。

教師として20年勤務してきた中で無意識のうちに囚われてきたメンタルモデルから自分を解放し、「対話を通じて相手を鏡とし、自分と向き合うこと」、「問いを共有し、正解のないものに向き合うこと」という学び手としての心構えで、教職大学院で皆様と一緒に学べることを大変楽しみにしています。一年間どうぞよろしく願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立若狭高等学校

橘 慶成 (たちばな きょうじょう)

福井県立若狭高等学校で美術を担当しています橘慶成と申します。昨年度、福井県総合教育研究所の学校組織マネジメント研修を受講しつつ事前履修に参加させていただき、この春、1年履修生として福井大学教職大学院に入学しました。

私は第2次ベビーブーム世代で、大学入試は受験戦争で敗戦を経験し、多くの浪人生と共に予備校に通いました。大学に入学した頃にバブルが崩壊し、卒業の頃は就職氷河期。その為、たくさんの同級生が大学院へ進学しました。友達から進路を聞かれ、大学院へ進みたいという気持ちもありながら、親にこれ以上は負担をかけられないので、福井に戻って教員を

目指すと答えました。辞令交付式で栗田知事から、大学進学が当たり前の時代が到来しようとしているので、先生方には、是非、大学院へ進学して更なる専門性を身に付けていただきたいという話をいただきました。この時にチャンスがあれば大学院で学んでみたいという気持ちが芽生えたことは今でも覚えています。昨年度、校長先生から研修制度や支援制度の仕組みについて教えていただき、チャンス到来と受講を決意しました。私は心の隅に教職専門ではないという劣等感にも似た後ろめたさのような感覚がありました。美術の大学で教員免許を取得する学生は少なく、その中でも教員になる学生はほとんどいません。教員になっていろんな経験を積み、様々な研修を

受けてきましたが、その感覚が無くなることはありませんでした。今回、教職大学院で、たくさんの先生方が残された教育実践報告や学校に関する著作物に触れることにより、私の中で教職としての後ろ盾が育っていく感覚があり、それは新鮮な感覚で、研修会や夏季集中講座をワクワクしながら参加させていただきました。日本が目指すこれからの教育の方向性と世界の教育の情報、カンファレンスを通じた対話の実践など、すでに多くの学びがあり、今後の教員生活に生かしていきたいと思っています。教職大学院の先生方、院生の皆様、どうぞよろしくお願い致します。

さて、入学したばかりなのですが、院生生活は入学した段階で1年を切っています。そこで、少し長期実践報告について書かせていただきたいと思います。学校改革マネジメントコースに所属していますので、長期実践報告書には自分がこれまで携わってきた学校改革について振り返っていきたくと思っています。私が主に行ってきたのはDXです。私は小学校の頃、父が買ってきたパソコンでベーシックプログラミングを見様見真似で打ち込んで遊んでいました。新採用の高校にはアップル社のマッキントッシュが配備されていて、フォトショップやイラストレーターと

いうソフトで画像処理や加工を行う授業を担当し、そこでマクロを知りました。マイクロソフト社のWindowsがXPにバージョンアップした頃、ビジュアルベーシックに興味を持ち始め、転勤となりました。その転勤先の校長先生に依頼されたのが入試処理システムの開発でした。翌年には進路指導部から調査書作成システムの開発を依頼され、ますますコンピュータの仕事が増えました。その後、入試、成績処理、指導要録といった様々なシステムをリンクさせ、現在の「賢者」という校務支援システムが入るまでを支えてきました。今年は若狭高校に転勤して4年目、図書DXセンターのセンター長としてICT推進とDXを牽引する立場となりました。今秋、県立学校等情報ネットワークシステムと校務用パソコンが一新されるので、新たな挑戦と実践に繋がればと期待しつつ、長期実践報告の完成を目指していきたいと考えています。

最後に私事ではありますが、美浜町在住の美術教員として、第5回美浜美術作家展(8月3日から16日:美浜町「なびあす」)に絵画を出展いたします。もしお時間がありましたら、ご高覧いただければ幸いです。よろしく願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井市松本小学校

出口 津代子 (でぐち つよこ)

実は、こう見えて(!?)、私は案外くよくよと悩む方である。2024年度、福井大学教職大学院の門をたたかどうか、結構に迷った。「これまでの教員生活、ずっと現場でやってきた。今更どうなのだろう」「現職を続けながら院で学ぶこと、果たして私にできるだろうか」など、とめどもなく考えた。結果として、何かをやるかどうか考える時、いつも心の中に浮かぶ言葉「迷ったらやろう。迷っているのは、やってみたくて思っているからだ!」に背中を押され、現在の私がいる。そして今、とても忙しく悩みは尽きないながらも、充実した日々を送っている。まだ始まって

3か月であるが、先程の2つの迷いに、今の私なら答えられる気がする。

現在の学校にはこの4月に赴任した。「変わりたい。変えたい」という空気を職員室に感じる学校である。全職員で語り合い、ミッションである学校教育目標を一新した。目指す子どもの姿を全員でイメージし、ビジョンとする「つけたい5つの力」を定めた。あとは、教職員1人1人が自分の立ち位置から全力でアプローチし、その過程で価値を共有した仲間とつながりながら、ねらいに迫っていくための具体を全教育活動の中で実践するのみである。私は校長として、実際にビジョンを具現化していく教職員に、い

かに主体的に実践してもらうかの道筋をつけ続けていくのみである。今、ワクワクする気持ちをもちながら「チャレンジする。変化：チェンジを恐れない」学校運営にあたっている。

学校教育目標の最初に「自ら、そして仲間と」とした。「自ら」とは「自分で力をつける」こと。自分の得意や課題から自分の今を知り、気づき考え挑戦する子を育てたい。「仲間と」とは「仲間と力をつける」こと。相手を大切に作る心を育み、仲間とともに失敗

をおそれず挑戦し、感動を分かち合う集団を育てたい。そしてこれは、本校の子どもたちだけではなく、職員室に問われていると思っている。自分で力をつける「個」としての、厳しくもやりがいのある営み、仲間と力をつける「集団」としての、計り知れない可能性をもった営みを、ここ松本小学校で展開していきたい。

少しずつ少しずつ、動き始めている。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/敦賀市立栗野中学校

中川 恵一 (なかがわ けいいち)

昨年度の事前履修を終え、本年度より福井大学教職大学院連合教職開発研究科学校改革マネジメントコースに入学しました、中川恵一と申します。よろしくお願ひいたします。

さて、私は小中教員として約20年、休む暇もなく日々児童・生徒と向き合い、授業や行事、部活動に走り続けてきました。しかし、縁あって行政職を務めることになりました。初めて知る行政という未知なる世界は不安でしたが、その4年間は、私にとって学びの多い、教育の本質に迫る充実した時間でした。

教員として一人の立場で物事を捉え、教育を考えていた私。行政職を務める中で、狭い常識でしか考えられていなかった今までの自分に恥ずかしさと後悔を感じました。児童・生徒に語ってきたことの根拠が崩れ落ちる瞬間でもありました。

しかし、「教育の本質とは何か」という核について、根拠をもとに広い視野で考える機会を何度も得ることができました。また、現場だけでは得られない学び、「教師とは何か」という問いについても多くの先生方や異なる立場の方と語り合うことができました。

それぞれの問いに、まだ完璧な答えは導き出せてはいませんが、多くの方との議論を通じて、教育について考える過程は、私の新たな財産となりました。

行政で学んだことをさらに追及したいと考え、昨年度、新たな学びと深い学びの視点を獲得場として「教職大学院学校改革マネジメントコース」の事前履修生となりました。その中で、カンファレンス型の語り合いの良さや、語り合うコミュニティの大切さを実感しました。また、このコミュニティの構築・存続こそ、未来に繋がる持続可能な社会・学校の要素であることを学びました。

そして、教育について語り合う中で、①一つの課題に対し多方面からの視点を獲得すること、②自己の実践や考えについて他者から価値付けされることの魅力を感じました。そして、自己省察の大切さと価値を再認識しました。

今年度は、昨年度以上に多くの方と語り合えるご縁を大切に、多様な視点で価値を見出すことを目指して取り組みたいと考えています。

さらに、今年度は大規模中学校という現場に戻りました。行政や教職大学院事前履修で学んだことを活かしつつ、日々の実践に理論を加えて取り組んでいこうと考えています。

しかし、久しぶりの現場に戸惑うことも多く、まだまだ悪戦苦闘・四苦八苦している状況です。また、部活動に加え、社会体育指導者としてのチームを指揮・運営する立場であり、放課後も分刻みのスケジュールで、日々てんてこ舞いです。理想と現実のギャッ

プの中で、時間をマネジメントする大切さを切に感じています。

そんな中で、「こんな状況は一生にそう何度もない。その時考えたこと、行動したこと、実践したことは必ず財産になるよ」と本年度最初のカンファレンスで、私の状況を違う視点で捉え、価値付けていただいたことが、現在の心の支えになっています。教職大

学院のカンファレンスという語り合いの良さ、意義を改めて感じての一年履修スタートとなりました。

「ピンチはチャンス」

今年1年の状況を楽しみつつ、私にも深く関連する働き方改革や教師の研修観の転換にも目を向け、教育の本質を追求していきます。

教職大学院の先生方、院生の皆さま、1年間どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/大野市開成中学校

増田 善宏 (ますだ よしひろ)

私が福井大学連合教職大学院で学ぶきっかけを与えていただいたのは、大野市定例教頭会で小林真由美先生から教職大学院の紹介があったことである。小林先生の説明から、新任教頭研修を履修していれば1年履修が可能であることを知り、教職大学院に対して少し興味をもった。しかし、日々の教頭業務の忙しさや長期実践報告書の大変さから、その時は教職大学院で学ぶ時間は作れないと感じた。

1週間後に広瀬泰司校長に呼ばれ、「キャリアアップのため、教職大学院で学んでみないか」と声をかけていただいた。教頭職になってから、学校から出て学ぶことが少なくなっていることに気づき、自分の心は再び揺れ動いた。しかし、教職大学院で学ぶことに対する不安が2つあった。1つは、教職大学院での修学に係る経費の面である。入学料が約28万円(県が半額を補助)、授業料が約54万円(令和6年度から市が約10万円を補助。久保俊岳教育長に感謝)がかかる。もう1つは、教職大学院での具体的な学びが見えないからである。広瀬校長にはすぐに返答せず、妻に相談することと、以前、福井大学連合教職大学院で学んだ経験のある上庄中学校の長谷川秀樹校長から話を聞くことで決めさせてほしいと伝えた。妻には「こんな機会はないよ。入学料や授業料は何とかなるから学んだら」と快く了解してくれたことと、長谷川校長からは、当時の教職大学院の学びについて説明していただき、「教頭は忙しいけれど、あなたなら

できるよ」と背中を押していただいたことで、入学を決意した。

今までの教職人生を振り返ると、「学ぶ」ことを通じて自分を成長させてきた。教諭として尚徳中学校と開成中学校で勤務した時は、学校が荒れた状態で生徒に対する指導が入らない状態であったことから、この状況を変えるには「学ぶ」ことしかないと思い、必死に学んできた。特に意識したことは、「本を読む」ことと「人に出会う」ことであった。「本を読む」ことについては、「本気の教育でなければ子どもは変わらない」(原田隆史著)が、自分の教職人生で最も大きな影響を与えてくれた。この本の中で「主体変容」という言葉に出会い、生徒を変えようとするのではなく、自分自身を変えようとする努力することを心がけた。時間を守ることや生徒より先に挨拶をすることなど、生き方の見本となる行動を実践することで、本気が伝わり、信頼が生まれ、生徒は私の言うことを聞いてくれるようになった。また、「人に出会う」ことについては、その分野での成功者に出会い学ぶことを心がけた。特に印象に残っているのは、仙台育英学園高等学校硬式野球部の須江航先生であった。須江先生は、当時、中学野球指導者として日本一を経験していることから、その空気を肌で感じとるために、仙台まで学びに行った。様々な話をさせていただく中で、野球の本質を追求し、心技体を高めるための練習

を行っていることを学び、自分の部活動指導に生かしていった。

教職大学院では、学校で取り組んでいる実践を、理論書を読んだり、教職大学院の先生や学んでいる

方々と対話したりすることを通して、省察し実践を深めていきたい。そして、「子どもが主役」となる学校づくりを目指していきたい。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/大野市教育委員会

松山 奈美江 (まつやま なみえ)

はじめまして。今年度1年間、院生としてお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

年齢や経験、勤務先、住んでいる地域などが異なる方々と語り合い、学び合えるのはとても楽しく、昨年の事前履修の時からたくさんの刺激をもらっています。1年間という短い期間ですが、せつかくの素晴らしい環境で学べる機会！おおいに悩み、じっくり考え、多様な見方・考え方を学び、実践と省察を繰り返し、「こんなに自分自身と向き合った1年はない」と思えるように頑張りたいと思います。

「大きな変化の年」

実は、今年は、私にとって大きな環境の変化が起きている年です。採用から今年3月までの21年間を小中学校の現場でしか過ごしたことがない私が、何とも思いもよらない行政機関へ異動。大野市教育委員会の指導主事になり、学校訪問での指導や研究会の助言などを任されるのは、言葉に言い表せないほどの緊張感を伴います。そして、それ以上に大変なのは、あまりに現場の教員の仕事とは違う慣れない行政の仕事。特に最初の2か月は、「何もかもが分からないのに責任ある仕事ばかり」という重圧と、「期日が遅れたら大事になる」という緊張感、「自分には務まらないのではないか」という不安感が常につきまとい、正直押しつぶされそうでした。そして、特別支援教育、幼小連携、学力調査など、覚えきれない量の多岐にわたる仕事には本当に驚きました。そんな毎日を経験しておりとても大変ですが、日々新しく学ぶことばかりでとても勉強になっているのも事実です。この

職に就いたことで、他市町や県の指導主事、市役所の職員、園長や保育士、小中学校の管理職、教育相談の専門機関、高校の教職員など、新しい出会いやかかわりも増えました。同時に教職大学院生としての1年もスタートしているので、人脈はこれまでとは比較にならない程広がっています。これは、「この職に就けてよかった」「教職大学院に入学してよかった」と思える一番の理由になるでしょう。この1年は、私にとって最も忙しく、初めてづくしの「かけがえのない1年」になると思います。

「今の私にできること」

大野市教育委員会での勤務になり、1つの学校(新たな勤務校)で進めていこうと考えていた研究が、急に市内全部の小中学校(小学校9校、中学校2校)を対象にした研究に変わりました。前任校で研究主任だった経験を生かして、まずは、各校の「校内研究会づくり」をしていこうと考えていましたが、この3か月で自分の思いも少しずつ変化してきました。「学校間をつなげる」「大野市の意識をそろえる」ことが可能な職場に変わり、「もっと大きく、長いビジョンで考えていかなければ」と思うようになりました。現在は、「今の自分にできること、今の自分だからできること」を考え、「こうなったらいいのにな」という感覚を大切に小さな改善を試みる日々を過ごしています。

教職大学院で、いろんな方々の実践を聞きながら学んでいきたいと思っています。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校

山腰 浩樹 (やまこし ひろき)

「学ぶことをやめたら、教えることもやめなければ
ならない」(サッカーフランス元代表監督 ロジェ・ルメール)

毎年、どの学校でも、年度初めに学校のPTAによって発行される広報紙の中で、「先生紹介」のページがあるかと思います。そのコメントの項目の一つによく、「座右の銘は?」とか「大切な言葉は?」ということがあります。それに対して、いつの頃からか上の言葉を挙げるようにしています。

この言葉は、20代の頃に受けたサッカーの資格取得の際に教わった言葉です。教員として、指導者として、これまでの自分の価値に満足せず、日々進化していくことが社会に出てからもやはり大切だということについて、自分自身に書き留め、忘れないようにと、私の中での座右の銘の一つになっています。

これまで、サッカー指導者として、サッカー協会の指導者資格や審判の資格を取ったり、トレセンのスタッフとして質の高いトレーニングをできるように講習会に参加したり、県外遠征をすることでプロを目指すような選手に関わる指導者との交流をしたりと、部活動顧問として、自分自身の力量を上げる努力をしてきました。

ただ、国語科教師として、そして、いち教員として「本質的な学びとは何か」、「教育の目指すべき方向はどこなのか」について真剣に考え始めたのは、附属に来てからのこの3年間かもしれません。決して、これまでも歩みを止めていたわけではなく、そのときにしなければならぬことに対して必死にもがいてきました。これまで培ってきたこと自体に意味がなかったわけではもちろんありません。ただ、ときには立ち止まり、これまで培ってきた教科観や指導観などの「点」を捉え直すことが大切です。これまでの学校での教科指導や生徒指導、子供たちとの関わりと、この附属での研究やこの教職大学院における長期実践によって、自分自身の変容・成長を振り返ること、対話を通して他者からの視点も加えながら価値付けを通して、これまでの「点」としての感覚を、

「線」として、つなげていくことこそがこの長期実践の意義であると考えています。

さて、話は少し変わりますが、3年前から県内の国語科の教員の研修の場である「福井実践国語の会」の事務局として、国語科の学びについて語り合う場の運営を行っています。昨年度から「全員にとって学びの価値のある国語の授業」というテーマを設定し、今年度も夏季休業中と冬季休業中の2回、「実践国語の会」の定例会の計画を立て、実施する予定です。本年度も8月3日(土)に附属義務教育学校にて開催できるよう計画しているところです。

「実践国語第10号」(平成2年1月発行)東出市二郎先生の巻頭言によると、実践国語の発足は昭和36(1961)年6月26日とありました。そのような60年続く福井県の国語の学びを牽引する伝統的なコミュニティである「実践国語の会」の事務局をさせていただく中で、初めは何から手を付けてよいかもわからない状態でした。しかし、幸い「世話人会」という、これまで事務局をされてきた先生方のご指導・ご助言を受けながら会の計画を進めています。

この会は、現在、30名ほどの会員の固定化されたメンバーに合わせて、各学校へ広報し、希望者を募って、会を実施しています。今現在の会員は、現役で教壇に立っている教師が半分以下という会になっており、国語科の授業実践研究の場としての意義をさらに高めていくためには、現役の先生方の参加をさらに促すための策が必要であると考えています。

あるとき、会長である浦井先生から「山腰君の好きなようにやんね」という言葉をいただきました。正直、1年目は特に、この伝統ある会の事務局として「やらなければならない」という責務を感じて、ただ行っていったため、自分が会を活性化するためにどうしたいか、というような思いが抜けていたように思います。これまで通りの研修のスタイルではなく、新たな研修観をもって、会をデザインしていくこと、何よりも、「自分自身がその研修に行きたいと思えるのか」を

軸にして考え、新たな研修の場を作っていきたいと考えています。

この会を運営できることはいろんな側面から意義のあることだと感じるようになってきました。そのような思いの変容や、会の具体的なデザインなど、この一年でも書き残したい学びはたくさんあります。

時代の変化に対して、これからの時代を築いていく子どもを育てていく教師が止まっている訳にはいきません。ただ、答えのないものであるがために、一人で推し進めていくことは困難です。この教職大学院の中で、院生の皆さんと語り合うことを通して、その答えを探る過程を楽しめる一年にしたいと考えています。よろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/越前町立四ヶ浦小学校

山本 幹也 (やまもと みきや)

今年度から福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学した山本幹也と申します。現在は越前町立四ヶ浦小学校で教務をしています。

教員になってから30年が過ぎました。初任校は中学校でした。今から考えると大学を出たばかりで「教えること」以前に「社会のこと」もよくわからなかったと恥ずかしくなります。昨年、事前履修に参加した時、現役から院に入られた院生さんやインターンをされている院生さんの話を聞き、教育に対する熱意や考え方の真摯さに驚かされました。最近の初任の先生は、授業も生徒指導も上手だと感じます。自分が初任の頃は、今のようにインターネットで簡単に資料を探したり、動画を見たりできなかったのも、当たり前次第に本を買い、先輩の授業のまねをしていたような気がします。今、本棚にある本の8割はその時に買った本で、30年前の教科書の教え方が書かれています。もう30年以上触ってもいないその本を眺めると、当時の自分は何かを求めていたのだと思います。

初任校から5年たち、2校目は小学校でした。中学校で社会の授業をしたり、部活動をしたりすることに面白さを感じていたのも、何か物足りなく感じました。しかし、毎日の授業をこなさなければいけないと思い、本を買ったり他の先生の授業を見に行ったりしました。研修では、他の先生の実践発表を聞くことが多かったように思います。

今思うと、初任者の時や違う校種に移ったときが一番研修への意欲が高かったように思います。その後、中学校や小学校に異動になりましたが、初めの頃よりは研修に対する意欲が高まらず、むしろ面倒だなと感じることが多かったように思います。

その後、小学校3年間、中学校で14年間勤務し、3年前に中学校から四ヶ浦小学校に異動となりました。部活動がなくなり休日の自由な時間が増えたこと、担任を外れたこと、コロナ渦で出かけることが減ったことから、何か新しいことを学んでみたいという気持ちになってきました。そこで、手っ取り早く生徒指導や特別支援について学べる放送大学の授業を受けてみました。インターネットで講義を聴く従来の学び方でした。新しい知識が知れたり単位が認定されたりするので、それなりの満足感はありませんでしたが、30年前大学生だった頃の授業形態と変わっていないと感じました。知識を伝達するには効率的なのだろうと思いました。

昨年度、マネジメント研修を受けました。どうせ講義だろうと思っていたところ、対話を重視した研修でした。学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」だと感じました。この学び方をもっと体験したいと感じ、事前履修を申し込みました。夏休みの夏期集中では、自分の実践や考えを語り、それに対して意見をいただける面白さを体験しました。そこで教えていただいたことを、さも自分が考えたことのように話

す自分がいたりします。学んだことを使えていると感じました。

大学院に入学するに当たっては、もう教員生活も残りわずかだし、学ぶには遅すぎるのではないかという迷いがありました。しかし、事前履修で校長や教頭をされていて院生として学んでいらっしゃる姿

を見て、自分も学んでみたいという意欲が高まり今に至ります。

教職大学院の1年間で出会うであろう多くの皆様との対話を大切にして、自分の知見を広げつつ、少しでも校内の教員研修や日々の授業に還元していけたらと思っています。1年間よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/あわら市芦原小学校

吉田 仁一郎 (よしだ じんいちろう)

初めまして。今年度から福井大学教職大学院 教職開発専攻学校改革マネジメントコース(1年履修)に入学しました、吉田仁一郎と申します。中学校で英語科教員として勤務した後、福井県教育総合研究所で教科研究センター2年、教職研修センター3年の計5年間行政職として勤務し、この4月からはあわら市芦原小学校で現場復帰いたしました。

この教職大学院で深めたいテーマは「学校と地域の協働」「地域とともにある学校」です。

教育総合研究所勤務時に、県内の様々な学校を訪問する機会に恵まれたことと、プライベートでは地域のコミュニティの一員として、またスポーツ少年団の保護者会長として、PTA 役員として一人の保護者、地域住民として外から学校と関わる経験をしてきたことが大きく影響しているように思います(まだ、現在進行形です)。

現在教務主任として、PTA 事務局を担当しており、今年一年間は、学校側と6年生の二男の学校のPTA

役員としての外側からの両方の役割を経験できる貴重な年になりそうです。

学校マネジメントに関しては、日々管理職と共に仕事をさせていただくことで、まさにOJTで「理論と実践」を学ぶことができています。一方、教科指導についても、英語専科として、3年生から6年生までの全クラスを担当しており、初めての小学校外国語に奮闘中です。

これらの実践をどのように長期実践研究報告書にまとめていくのか。ゴールは全く見えていない状況ですが、毎月のカンファレンス、夏季集中講座で、他校の先生方との語り合いを通して糸口を見出していきたいと思います。教職大学院の先生方、院生の皆様、1年間どうぞよろしくお願い致します。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

去年と比べて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校

伊達 あさひ

去年と比べて、今年は大学院生活が充実している。インターンは2年続けて中藤小学校に行かせていただき、金曜カンファレンス（以下、金カン）では運営をする立場になった。以下ではインターンと金カンを別々に分け、去年との取り組みの違いを述べていこうと思う。

インターンでは2年続けて中藤小学校に行かせていただいている。去年とは違うメンターの先生にいたが、去年と同じ6年生を見ている。今年は去年出来なかったことをするように心掛けている。去年は算数で授業実践をする機会がなかったため、今年は算数で授業をさせていただいている。なぜ算数であるかという、理由が2つある。1つは、昨年中藤小の校長に授業をするなら算数でしたほうが良いと言われたからである。算数は好き嫌いがはっきりしている科目であるため、苦手な子でもわかりやすく教えることができる。どの授業をしても分かりやすく教えることができると言っていた。もう1つは、自分自身算数が苦手であるからである。自分が苦手であるからこそ経験をして自分の授業実践力を上げたいと思った。しかし、苦手意識があるためどうしても全体を考えた授業や流れを考えた授業をすることができない。一度授業終わりにメンターに板書計画を書いてきてそれを見せてほしいと言われたことがある。メンターの先生は私がした授業に対してあまり感想を言わない先生であるため、そのように言われた際はいかに準備をせずに授業をしてしまったのかが分かり、すごく反省をした。インターン生だか

らしょうがない、授業は経験を多く重ねるとできるようになっていくと周りの先生方から言っていたが、それでも多くの多くの授業を見てきたため、少しでも授業を上手にできて良いのではないかと感じてしまう自分がある。これからも授業をすることはあるため、1回でも自分の満足いくような授業が行えるようにしていきたい。算数の授業実践だけでなく、去年に比べて見たいものを明確にして記録をとることができている。去年は何を記録したらよいか分からず、苦勞していたが、今は学級経営における子どもの言動に対する教師の働きかけを見ている。去年は持ち上がりのクラスを見たため、1からクラスを作り上げていくところを見ることができなかったが、今年は去年と担任が違うためメンターの先生と子どもたちの関係性も最初から見ることができている。見るものが去年より多く、経験や知識も増えたため、自分に今見たいものがあるということに対して成長を感じている。

金曜カンファレンスに関しては、今年は金カン運営する側になった。今年は学校とは？を軸に社会視点や子ども視点で見ていこうと思っている。今年1年どのようなテーマでしていくのかを春休みから考えながら運営をしているが、M2の人数が多いため、すぐに意見がまとまらず、話もなかなか進まないことも多々ある。これまで20人程で話し合いをしたことはあるが、運営側にまわって自分たちが動かすための話し合いは初めての経験であるため、うまくいかないこともありながらも頑張っている。また、M2に

なってから運営をするだけでなく、ファシリテーションもしている。これまでファシリテーションはすごく難しいものであるというのを去年のM2の先輩を見ていて思っていたが、それを簡単にこなしていた。実際に試してみても感じたことはいかにインターンの話をしてくれた子の話とつなげて周りの子にも話がでるような状態を作ればよいのかの難しさである。また、1人1人の話の掘り下げ方の難しさである。まだまだ自分にはファシリ力が足りていない

ため、まずは話しやすい雰囲気や環境を作っておくところから始めていきたいと思う。自分にできることから少しずつしていきたい。

このように去年に比べて今年はM2であるからこその経験がたくさんしている。自分の負担にならない程度でインターンにおいても金曜カンファレンスにおいても学んだり、運営をしたりしていき、大学院生活を充実させたいと思う。

人と関わることで大切なこととは

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 里沙

教職大学院での生活が2年目になり、すでに3ヶ月を終えている。インターン先は昨年度と同様であるが、配属クラスが変わった。昨年度見ていた子どもたちの授業での学びや学校生活での学びが1年間に変化していたことを感じた。今年度は6年生を見ており、昨年度あまり接してこなかった子どもたちを見て4月は緊張と楽しみで溢れていた。4月でも子どもたちは前期課程での最高学年であることでの責任や来年度の後期課程に向けての準備など、様々な場面で苦労・成長が見られる。

そんな中、昨年度のインターンシップを通して私は子どもとの関わり方を直さなければならないと思っていたことがあった。子どもとの距離が近すぎて、お姉さんと思われていたかもしれないと感じていた。それを月間カンファレンスで同じグループになった先生方に話した。そこで、「距離を置くことでその子にとって悲しくなる場合がある」と言われたとき、距離を置くことを考えすぎると子どもの心情の方に気が付かないようになり、逆に子ども一人一人を理解することができないのかもしれないと思った。この日があってから、“今は距離を置いた方が良い”と思わない限りは自分から距離を置くことはやめようと決めている。子どもとの関わりの中で私の方から話

しかけることでコミュニケーションを取ることが出来る場合と子どもの方から話しかけられることでコミュニケーションを取ることが出来る場合がある。子ども一人一人にとってどのようなスタイルが良いのかを考えて子どもと関わっていく。私と話すことが心の拠り所だと思っている子がいるのであれば、全力でその子と関わり、話すことが楽しいと思ってもらえるようにしていきたい。

インターンシップでは子どもとの関わりについて記してきたが、これからはストレートマスター同士の関わりについて記していく。M2になったことから、金曜カンファレンスの運営に携わるようになった。とはいえ、昨年度にM1でも金カンの企画をしたこともあり、M1の夏休みから話し合う時間を設けている。そこで気付いたことは、時間をかけて話しても元に戻ってしまったり、何日も同じ論点を話し合ったりしていることである。M2になったら金カンの運営をしていくことが決まっているため、大切にしたいことを決めるために時間をかけ、1年間を通したテーマ決めにも時間をかけ、春休みの最後の週は毎日集まるメンバーがいたぐらいである。

なぜそのようになってしまうのか。私たちは要領が悪いのかもしれない。そのときに一番重要な論点があるのかを全員の共通認識で会議を進めることができていない。会議で話す優先順位を考え、それを計画してくれる子たちがいる。その計画通りに進むと良いのかもしれないが、どうしても運営のことで共有しておかなければならないことがでてくるため後回しになってしまうことが多い。また、会議の内容によっては、論点が違ったりお互いが目指していることが違ったりする。お互いの考えていることを会議の時間で理解しようとしている。それを擦り合わせるために時間を使ってしまうことがもったいない。

どうすれば良いのかと悩んだときはあった。全員の本音を聞くことができたらと思ったときもあった。しかし、それをするには時間が必要である。全員が授

業やインターンシップで日々忙しいため、集まることは難しい。そう考えたときに、少人数で日常的に話すことが出来れば良いのだが、今の私は仲の良い人や運営のことについて個人的に話すことが多い人としか話をしていない。一部の考えしか知らない私はこれから何が出来るかを考えた時、金カンの運営のことだけでなく日常的に院生とコミュニケーションを取ることが第一に出てきた。これからはなるべく院生全員とコミュニケーションを取って、少しでもそれぞれが金カンや大学院に対して思っていることを知っていききたい。

このように私は子どもや院生など、人との関わりを大切にしていきたいと考えている。自分ができる範囲で行動していきたい。

インターンと講師の狭間で

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

金田 潤之介

私は1年の時にはインターンシップだけでしたが、今年からは附属にて講師も行うようになりました。始まってから3か月経ち、授業のコマ数が多いこともあり、常に「授業をどうしようか?」「子供達はのってくれているのかな?」「ちゃんと子供たちの学びになっているのかな?」という答えの無い問いがぐるぐると自分の中で周り続ける毎日です。

4月に初めての職員会議があるということで「授業をどうしていこうか」という不安に襲われながら学校に行くと、3教科持つということを教えていただきました。その3教科は社会と音楽と体育で、音楽も専門ではあるが1年生ということもあり「どうしたらいいのだろう」と不安になったのを覚えています。不安に襲われそれぞれの教科を専門にしている先生方に聞きに行くと、丁寧に教えて下さり「基本ができればいいから」「リトミックが大切だよ」「体育は自分が主でやるから大丈夫」と言ってくださって

少し不安が少なくなりました。しかし、完全になくなることはなく、実際に授業が始まるまで不安は消えることはありませんでした。授業が始まり「これでいいのかな」と思いつつ、授業をしてみると、自分が想定していたよりも子供達が楽しそうに反応してくれていて自分の中でも「よかった」と感じていました。他の先生方も「ちゃんと社会の授業できていたよ」と言って下さり、報われた気持ちになりました。しかし、ふと同じ講師であるM1の後輩を見て見ると、「入学式から種を植える」など、自分とは段違いに教材研究をしていて「自分はここまでできていない」「でも、次の授業が近づいてきて教材を追究する時間が取れない」「何とかして時間を作らないと…」と、とても葛藤をしていました。

校外学習予定立てや単元構成など色々なことの段取りが付き、余裕が出始めたのは6月の初め頃で、金曜日のカンファレンスにて後輩たちのインターンで

の学びを聞いている時に「あれっ、他の先生方の授業を見る事ができていない。そういえば自分ってインターン兼講師っていうけど自分にとってインターンって…」と途端に感じ始めました。また、同時に6月の中旬ごろになると自分の机に子供達のアンケートが上がってきていました。そこには自分の持つ社会の教科のアンケートにて「どちらかと言えば、好きではない」「好きではない」の欄に25%おり、クラスの4分の1、およそ8人から9人がそのように回答をしていました。それによって体調、精神状態等が崩れましたが、「何とかしないといけない」ということも思っていました。

インターンという立場のもと、色々な先生方の授業を見に行くことにして見取りをしてみると、自分の中でこれまで見えていたものが見えなくなっているように感じました。

M1の時は一人の子供を見取り続けて、その子が「なぜそのようにしたのか」を追っていました。その中で

「その授業ではどのようなことを大事にしているのか」「自分だったらどうするのだろうか」ということを考えて授業を見ていました。しかし、今は、講師になり、現実的に今の自分ができていない問題点を解決したいという気持ちで見ているため、「自分が授業をする時の子供の姿」と「先生方が授業する時の子供の姿」を比較して、「この授業方式だったら生徒達一人一人の意見を拾えるのではないか」ということを見るようになっていきました。立場が変われば見方が変わるとは思っていましたが、ここまで違うということに驚きました。しかし、今のやり方は子供の見取りが薄れているように感じており、子供達がより深い学びをとすることを考えた時にはやり方を変えなくてはならないと思います。

今すぐに改善するという事は難しいが、少しずつでも子供達が「わかる・面白い・楽しい」を感じながら学べるように改善していきたいです。

理想との葛藤

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校 笈田 峻汰

大学院に入学して1年と少しが経った。昨年度は高志高校でインターン生として、そして今年度はインターンに加えて非常勤講師としての生活を送っている。新しい生活にも慣れ始め、日々試行錯誤しながら授業をおこなっているところだ。今回は生徒の声から考えたことと学級活動について書いていこうと思う。

あるとき、生徒と数学の授業以外の話をする事があった。すると生徒から「〇〇の授業、質問ばかりしてくるで嫌なんよな」ということを聞いた。詳しく聞いてみると「この問題の答えは？」というような答えが決まったものではなく、答えが1つに定まっていない、自分の考えを答える質問に対して嫌だと思っているようだった。たしかに、自分が授業をしていても公式の確認や既に学習したことは進

んで発言しているのに、初めての問題に「どんな考え方使えそう？」と答えが明確でない問いを出しても静まり返っている。もちろん、難しくて本当に分からないのかもしれないが、そもそもの教師の考える授業スタイルと生徒が求めている授業スタイルに差があるのではないかと感じている。自分は授業で解法のパターン別で解説をすることがある。生徒は聞いているだけなので頻度は多くしたくないが、この形式だと、ほぼ全員が顔を上げて話を聞いてメモを取っている。自分は高校でも探究的な授業ができたかと考えているが、自分が思っているだけで生徒からは求められないかもしれない。この理想と現実の差に悩む日々である。

次に学級活動について、考えたことを述べる。高志高校ではLHと呼ばれている。この時間を使って、

遠足の計画を立てたり、時にはクラスでレクリエーションをしたりする。特にレクリエーションについて、ある先生と話したことがある。それは、遊んでいるだけでその先につながる学びはあるのかということである。先生と話をするまでは楽しそうに活動しているし、普段授業ばかりでリフレッシュになっているとしか考えていなかった。あくまで学級活動なのだから、レクリエーションから生まれる学びがないといけないことに気付かされた。そこでレクリエーションから得られる学びとは何かを考えた。1つは自分たちで計画する力である。レクリエーションとはいえ、何をするかは自分たちで決めている。クラス全体で1つのものを決めるというところに価値があり、他の場面でも生かせることだといえる。もう1

つはクラスとしての絆を深めるところにあると考える。ありきたりなことかもしれないが、レクリエーションを通して、他人の意外な一面に気付くことができたり、クラスの人と仲良くなったりする。大人になると、1つの集団で何かを作り上げる、絆を深める機会というのはぐんと減る。今しかできないことで、少しでもこの先につながる学びを得てほしいと思う。

ある意味、今回書いた2つの経験は探究的な授業をするという理想と生徒にこうなってほしいという理想から感じることなのかもしれない。その理想が正しいのかこれからのインターンや講師をする中で本当にこのままでいいのかを考え続けていきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

「子どもファーストの音楽教育」とはどのようなものか

ミドルリーダー養成コース2年/宮古島市立平良中学校 前川 尚代

「音楽によって心が動かされると、気持ちが良いものだ。心が安定していつのまにか笑顔になるよ。だからこそ、さあ、歌おう。身体(からだ)を動かそう」と、毎回の私の授業ルーティンは「歌うこと」から始まる。

院生として二年目に入り、毎回のカンファレンス参加では、毎回多くの気づきがあり、他者から学び得た実践を、自己の実践に取り入れながら「私自身が音楽を楽しむ」という思いで授業実践を行っている。

昨年度はどのような子どもの学びを求めるのか、過去の教師が書いた実践記録と一緒に検討したり、ときには指導案を検討し合ったり、日頃の悩みを語り合いながら、学習観や教育観を共有したりしてきた。自分自身がこれまで実践してきた歩みを丁寧に

振り返り、そして、省察することが習慣になってきたのではないかと考える。

振り返れば一年前は、何が正解か分からないまま、まずは行動してみることから始まり、時間(とき)だけが過ぎていった。しかし、周りの院生と対話していく中で、自分の考えも徐々に変わっていったのである。

例えば、昨年度の「創作」授業において、「私の推し」の音楽紹介から発表へ向かう過程で、好きな音楽の新たな出会いから、音楽の授業は「楽しい科目の一つ」という声が増え、学習の効率化を図ることができ、不登校生徒への発信及びその共有としては成果であったが、それは単なる調べ学習でAIが導いた偶然であり、情報が多すぎるあまりそれを整理する作業がさらに必要となってしまった反省が残る。教師主導

もいつのまにか増え、他者との対話は少なく、深く考えたり追究したりする時間確保ができずに悩んだ時期が多かった。

授業デザインの失敗だったのだ。

そこで、ラウンドテーブルの参加を通し、あるヒントを得た。例えば英語の授業では教科書だけでなく、「TikTok」からの身近な話題からとりあげたらどうか。という話題から、自由なスタイルの発表を実践することにし、グループの分け方から子ども達に考えさせた結果、好きなジャンル同士で集まれば盛り上がると思う、というある子どもの発想から様々なグループができたのである。J-POP チームに「アニソン」チーム、癒しの音楽等などそのジャンルは幅広く、子ども達が盛り上がりを見せる中、教師の私も昭和の音楽スタイルを紹介することになるまで、いつのまにか子ども達と一緒に楽しむ自分がそこにいた。そうだ……。これこそが私の強みであり、一緒に楽しむことができる「音楽教師」だとあらためて原点にかえりながら、共に学ぶ楽しさが必要だと、考えるようになった。

本校には、一学級に特別に支援を必要とする子が多く在籍しており、さらには歌うことに苦手意識を強くもっている生徒も少なくないことが、年度始めの教科オリエンテーションでわかった。しかしながら子ども達の様子を見ていくと実に表現豊かであることに気づく。次第にもっと「心の耳」を育てていこう、どのようにすれば表現力をもっと高めていけるだろうか。表現豊かなこの子ども達の個性を一人一人が伸ばしていくためには、互いに高め合う人間関係をつくっていけばそれぞれの持ち味を伸ばし、輝くのではないかという考えが新たにうまれた。

まずは子どもファーストだと考えること。子ども達の「先生、〇〇をやってみればいーんじゃん」の声

になるべく多く応えるようにする。それを引き出すには発問の工夫だ。そして発意を待つ。昨年度以上に意識をしている。

出会った先生の中で、白い歯を見せながら笑顔で次のようにおっしゃっていた言葉を思い出す。本来音楽は「遊びの要素」が多いわよね。英語でも言うじゃない！」 「play music ってね」

なるほど！次の日から私の心は「play music」の言葉でいっぱいだった。

「表現を工夫しながら指揮をしてみよう」のねらいで、世界的に有名な「小澤征爾さん」が指揮をしている動画を視聴した。好き勝手真似させていくうちに、自然と交響曲第5番の「運命」という曲が「4分の2拍子」であることに、子ども達は気づく。まさに「play music」というヒントから主体的な学びにつながった瞬間だったといえる。そしてその授業は同学年の全学級で実施し、各学級のマエストロが1名～2名現れた。

教職大学院での多くの出会いがあり、対話から多くのヒントがあったからこそ、授業の工夫改善にせまることができている。また、本校には若手の先生方が多く、授業参観の機会が増えたことにより学ぶ機会も増えた。今年度の研究である「子どもファーストの音楽とはどのようなものか？」について、まずは子ども達に自由な表現で良い、から始めた歌唱活動。歌声が響くと心も開放された気分になる。1年後の子ども達の姿を想像しながら、その歌声はクラスの雰囲気ぐっと明るく照らし、音楽を超えて、もしかしたら他の教科でも学ぶ意欲につながるのではないかと考える。

授業の1時間、1時間を大切に。そして子ども達と共に、2年目の実践を深めていきたい。

組織を活性化させる熱意

学校改革マネジメントコース2年/葛飾区立常盤中学校 平岡 栄一

学校改革マネジメントコースでの学びも2年目を迎えた。1年間学んできて、自分は変わったと感じている。最大の変化は「肩の力が抜けた」ことだと思う。

昨年度に現任校への異動があり、様々な課題対応を急速に、強力に行う必要があり、当初は校長として強いリーダーシップを発揮していた。

一方、カンファレンスやラウンドテーブル、そして集中講座では、様々な校種、職種、職業の方たちと出会い、対話をする中で子どもたちや仲間たちのために試行錯誤する人々の姿や、これまで全く考えていなかった視点への多くの気づきがあった。また自分の実践について語り、問いかけに応じる過程で内側からエネルギーが溢れ、何日かすると自分が語ったことや新たな視点が自分の行動の変化や他者への働きかけの変化に繋がっていくことを何度も経験することになった。

そのような折、重要な案件への対応があった。一連の対応後に、改めて案件の当事者A、当事者Bから個別に聞き取りを行なった。当初は聞き取りであったが、2回目にはそれは対話となり、3回目は完全に対話であった。そこで目指したことはAとBと自分が協力して何がどのようであったのかという真実を探ることであった。これには当事者がリラックスして、自身を客観視することが必要であったが、対話によりこれができた。そして「決定的なことは何もなかった。小さなコミュニケーションの行き違いを放置したためお互いを誤解した。今後には生かしたい。わだかまりは皆無である」という理解が生まれ、A、B、そして周囲の、生涯有効となる学びにつながった。学校改革マネジメントコースでの「対話」を続け「肩の力が抜けた」からこそ、この理解に至ることができたのだと思う。

さて、現在の自分の実践であるが「対話」を通して、「本当に必要なものは何か」「真実は何であるか」を探ることを多くの場に広げている。会長を務める東京都中学校英語教育研究会、東京都中学校清和会を始めとして、所属する様々な組織で、職種や立場に関

係なく、互いをリスペクトしつつ率直な意見交換、「対話」を通して新たな気づきや価値を生み出そうと注力している。

本校は今年度が創立70周年である。70年間に渡る人々の尽力への感謝は、現在の生徒の活躍を存分にお見せすることで表し、改めて本校の良さ、人々が協調することの大切さを感じていただき、引き続きのお引き立てをお願いできたらと思う。一方で価値ある持続発展をする地域から日本、世界に貢献するグローバル人材の育成を継続させ社会に還元する。

また部活動の今後の運営であるが、自分は本区では地域移行ではなく、「地域連携」が良いと思い実現への活動を継続している。地域連携では、教員顧問と地域顧問が協働して指導や運営にあたる。部活動顧問になりたくて教員になった者は多く、そのような教員は活力に溢れている。その力を無理なく活用する。生徒は自分たちの活動ができることに感謝しつつ、責任をもって運営に参加し、保護者も運営に協力する、というコミュニティをつくり、企業や地域の協力も得て、区全体の活性化につなげたい。

東京サテライト・ラウンドテーブルでは、現在の様々な教育改革の中で「本当に大切なものは何か」をラウンドテーブルに関わる全ての方に探っていただきたい。最近、自分が感じるものの一つが、思考停止状態になっている人々が増えているのではないかという思いである。文部科学省、都や自治体の方針に則した学校運営は重要であるが、果たしてその方針の背景に思いを馳せているか。文書の文字面を斜め読みして「分かった」となっていないか。文書を熟読したとしても、自分で考え、工夫して課題に立ち向かわなければ良い結果には繋がらず、むしろ後退する。

2年目も折り返し地点であるが「対話」を続け、多くの人々と共に「組織を活性化させる熱意」をもち、全ての人々に組織の一員として、一個人として協働によりゆったりと充実した人生をお送りいただきたく、今後もさまざまな連携や実践を続ける。

「自律した学び手」の育成に向けて

学校改革マネジメントコース2年/石川県加賀市立錦城小学校 坂口 明美

福井大学教職大学院に入学させていただき早1年4ヶ月が過ぎようとしている。昨年度はチャレンジングな一年となった。自身の異動、大学院入学、県小中学校長会副会長拝命と変化の大きい年であった。このような機会をいただいたことに改めて感謝している。

5月のカンファレンスでは、「学校での協働研究の現状を踏まえ、これからの展望をひらくーその意味と実践ー」「小さな一歩」というタイトルでの実践報告をお聴きした。他校の実践を通して、自分たちの学校の伝統を再度見直していく取組や、「授業を開く」ことを通して、学校全体の授業を改革していく取組が素晴らしいと感じた。この実践を通して、自校の課題に向き合い、目標を達成するための具体策を愚直に続けていくことの重要性、前例踏襲は後退であると再確認できた。本校においても、着実に歩みをすすめていきたい。

テーマ「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」でのグループセッションでは、主に2つの観点での取組について交流した。1つ目は、授業を中心とした学校改革への取組である。本市では、市教委主導で昨年度の3学期から、自由進度学習という手法を取り入れ、子どもたちの学びの転換を図っている。自分で計画を立て、自己選択・自己決定しながら学びを進めていくことで、学びの楽しさを感じると共に、自律した学び手となるよう育成することを目指している。自由進度学習はあくまでも手法であり、子どもに学びを委ねることで、自律した学び手を育成することを目指している。自由進度学習は、全体の2割で取り入れることで、子どもたちが自律した学び手に向かっていくということをおある書籍から学んだ。その実践内容をもとに、効果的な単元、領域、場面の追究を研究にて進めている。また、学びを委ねた際、子どもたちが効果的に学び進めることができるためには、基礎基本の力も重要である。そのため、学力向上部と

連携して基礎基本の定着を図る取組も進めている。グループ内の先生方からも、本丸である授業を大切に考え取組が進められているとお話をお聴きでき、本校でも、ぶれることなく、授業を本丸に実践を推進していきたいと改めて感じている。2つ目は、不登校対策についてである。不登校特例校としてのCOCOLOプランと銘打った実践をお聴きし、すばらしい取組であると感じた。昨年度の小中学校の不登校者数は約30万人と過去最多。毎年のように記録を更新している現状から、学びの転換を図る必要があるのではと感じている。本市でも、今年度からSSR（スクールサポートルーム）を各校に設置し、支援員を配置している。このSSRでは、子どもが自分で学習を計画し実践していけるようになるための支援を行う。そのことで、子どもたちが生涯を通して自律した学び手となれる力を育てていくことを目指している。

現在の全国的な不登校の状況を鑑みると、今までの一斉指導での学びに限界があるのではないかと改めて感じたのは、算数の学習での子どもの姿を見たからである。2時間分の学習内容を、子どもに委ねたとき、早い児童は20分で課題を終えていた。その姿を目の当たりにして、問題を早く終わらせる力のある子は、今までの学習で、その残りの時間が待ち時間となっていたのだと考え、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。反対に理解に時間がかかる児童は一斉授業でのスピードについていけず、消化不良のようななんともやるせない気持ちが日々湧き起こっていたのだと思うとこれもやるせない気持ちになった。これは、私が目指している「教えひたり学びひたる」（大村はま氏）という状況から随分かけ離れている。

教員時代からとにかく授業を大切にしたいと考え、日々の実践に取り組んできた。1日に1時間でいいから、子どもたちが心の底から「楽しかった！」と思える授業をしたい！という思いで日々奮闘していた。管理職になった今もその思いは変わらない。

最後に、評価や求められる学習と変わる試験問題についての話をお聴きした。評価や大学入試の試験問題は、子どもたちの学びの方向性に直結する大事なテーマである。最新の情報を知り、最終的なゴールを明確にすることで、小学校段階で確実に身に付ける必要のある学習内容を、しっかりと定着させたい。

その具現化に向け、子どもたちの学びに向かう姿勢を更に高められる環境づくりをしていきたい。

全ては子どもたちのために、全ての子どもたちのために…。

焦らず、ゆっくりと

学校改革マネジメントコース2年/福井市明倫中学校 三上 勝

福井大学教職大学院に入学して、2年目に入った。昨年度までは行政機関(福井県教育総合研究所)に勤務し、主に教員研修の業務を担当していた。さまざまな研修を通して「教員の学び」について考え、実践を行ってきた。そして、月間カンファレンスやラウンドテーブルでその実践を語り、新たな視点を発見し、自分自身の学びをアップデートしてきた。

そして、4月、環境が大きく変わり、3年振りに学校現場に復帰した。勤務校の明倫中学校は全校生徒約630名の大規模校であり、この規模の中学校に勤務するのは自分にとって15年振りとなった。4・5月は、環境に慣れることで精一杯で、自分のやりたいことがなかなかできなかった。6月に入り、生徒や同僚の先生たちのことが少しずつわかるようになり、自分がやりたいことに少しずつ取り組み始めた。

自分がやりたいこととは、同僚の先生たちと実践コミュニティをつくり、「先生たちの学び・私自身の学びをアップデート」していくことである。明倫中学校の職員構成は、20代・30代の先生が半数以上と若く、若手教員研修や中堅教諭等資質向上研修を受講している先生も数名いる。このような若い先生たちと実践コミュニティをつくり、対話と傾聴をもとにしたカンファレンス(みたいなもの)を実践していきたいと明倫中学校に赴任してから思っていた。

しかし、いざ実践してみようと思うとなかなかうまくいかない。まず、時間がない。勤務時間内で場を設定しようと思っても、そのような時間が設定できない。また、私自身、学年主任や研究主任のような学

年や学校のまとめ役ではないので、先生たちに声かけ(「〇〇について話し合いませんか」など)をすることに抵抗がある。声かけをしたとしても参加してくれる先生がいるか不安でもあった。でも、先生たちといろいろと対話して学びを深めていきたいという強い気持ちはある。

このような葛藤の中で学校生活を送っていたが、6月下旬の指導主事訪問が1つの転機になった。指導主事訪問では、私が担当する社会科が提案授業をすることになった。そのため、教科会や校内研究会の分科会を開いて、提案授業について多くの先生たちと話し合うことになった。この機会をチャンスと捉え、たくさんの先生と対話する場を設定した。

教科会では、5名の先生たちで地理の単元「中部地方」の授業づくりについて話し合った。単元を貫く学習課題をどのような課題にするか、生徒の学びをどのように見取っていくかなど、授業者の思いを尊重しながら意見を出し合った。分科会では私が司会(ファシリテーター)を務め、参加している全ての先生(約20名)に意見を発表してもらった。社会科以外の先生の意見はとても貴重であり、授業づくりの参考になった。また、一人ひとりの先生の授業についての考えを聞くことができ、様々な学びを得ることができた。

今回、指導主事訪問をきっかけにさまざまな先生たちと対話をすることができた。今後もこのような話し合う場を設定して大いに語り合っていきたい。これまでは気持ちばかり焦り、早く話し合いの場を

つくらなければ、実践コミュニティをつくらなければ
 ばと思っていた。しかし、話し合う場をつくることや
 実践コミュニティをつくることは「手段」であって
 「目的」ではない。焦らず、ゆっくりと「目的」であ

る「先生たちの学び・私自身の学びをアップデート」
 していきたいと考えている。



月間合同カンファレンス報告

学び方

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

帯川 夏穂

「どうして授業を見るの？」と聞かれて困ることがよくあった、という報告を聴きました。私も心当たりが…。見取りよりも支援に回ってほしいというお願いをよくされて、自分も喜んでやっていました。今思えば、去年は「見取り方」が目的・手段・焦点、すべてが雑然としており、自分自身もなぜ授業を見ているのか分からなくなる時がありました。しかし、福井大学附属義務学校の1年生たちは、休み時間にあさがおの花を採集したり、花を水に溶かした色水で絵を描いたり、つかまえたアマガエルを観察していたり、タブレットで算数の復習をしていたり。一人ひとり学び方が全く違うということに気づかせてもらいました。それから私は、一人ひとりの学びのストーリーやそれが生まれる場を詳細に記録するようになりました。これが結構面白く、そして自分が授業をするときに役立っている実感があります。子どもの学び方が見たくて、(私もそれから学びたくて)自分の授業スタイルが子ども主体に自然となっていると思います…もしかしたら全然できてないかもしれませんが、すみません。

今回のカンファレンスでは、入試についての様々な資料を検討しました。早稲田大学では大学の授業

で何を学びたいのか、展望や課題をショートストーリー程度の文章にするそうです。私が受けた教員採用試験でも、同じ感じでした。でも、お茶の水女子大学は、図書館入試という大学の図書館を使ってレポートを作成して発表をする形態をとっているそうです。そんな試験があることを初めて知って、驚いたし、楽しそう！と思いました。インターネットやチャットGPTに聴けば、今はなんでも答えてくれるのですが、得た情報や知識の中から「応用する」ことが求められているのかな、それが真の知性なのか、とふと思いました。それから少し興味が湧いて、いろんな大学の入試形態を調べてみたところ、ほとんどが「探究型」に移行していると感じました。特別な入試ではなく、高校入試や共通テストなど多くの人が受ける進学のためのテストで、探究力を評価する傾向がありました。ここで、探究力があるかないかどうやって判断するのか？と疑問に思いました。小論文やレポート、グループ探究&発表で素晴らしい探究の成果ができたとして、それを本当に良しとしていいのでしょうか？対してグループではなく一人で簡素あるいは分かりにくい探究の成果ができたとして、それをダメとしていいのでしょうか？そこで私は、探究力は、発表ではなく学び方・学びのストーリーに現れ出

と考えました。どんな学び方をしたのか詳細に記録すること、採用側（教師）は学びのストーリーを詳細な記録をきちんと見取ることが大切になるのではないかと思いました。

私は今、1年生の音楽と造形（図工）、4年生の造形（図工）の授業をさせていただいております。特に音楽の授業において、目に見えない音楽というものを子どもたちはどのように感受しているのかよく見えています。作曲家の宮川彰良さんが書き下ろした「ずむずむずん」という曲を聴いた子どもたちは、踊り出す子もいれば、じっとどこかを見つめて聴いている

子、教科書の挿絵を見ながら聴いている子、鼻歌を歌っている子、楽器の名前を当てようとしている子。以前の私なら「座って静かにきこう！」と言っていたと思います。でも、学び方は人それぞれであたり前で、教師がその様々な学び方を受け入れて背中を押していくことで、真の探究力が育まれるのではないかと思索しています。

このように自分自身の教育観や子ども観が変化したカンファレンスでした。対話してくださった先生方、ありがとうございました。

生徒とのつながり

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校 川嶋 海音

新年度が始まり3か月が経った。去年の今頃は、教育という分野において右も左もわからず、毎週出る課題をこなすのに精一杯だった。そのため、インターンも蔑ろになってしまい、生徒に関わるのがあまりできなかったが、今年はインターンに行ける日が1日増えて週2回になった。今年度はもっと生徒と関わるができると思って楽しみにしていた。

4月、クラスの生徒は、私に対して「誰？」という感じで、特に話すことなく1日が終わる。ある日、ショートホーム（朝の会）で、メンターの先生に「なんか話してみな」と言われ、1分くらい話す時間をもらったが、おもしろい話を考えてみても、生徒はあまり笑ってくれなかった。こうして週2回のインターンが過ぎていった。その間、生徒と話すことはほとんどないが、生徒と同じ時間を過ごそうと思い、数学以外の時間の授業の生徒の様子も見ようにした。

音楽の時間。その時間は合唱コンクールの振り返りをおこない、一人ずつ発表するという時間であった。そこでは、みんなが合唱コンクールを通して知ったこと学んだこと、大切だと思ったことなど様々な思いを知ることができた。今まで私は数学の授業ば

かり見ていたから、こうした生徒の思いを知る機会は初めての経験であった。いつもふざけているような生徒から静かな生徒まで、真剣に合唱コンクールに取り組んでいることが分かり感動した。その授業の音楽の先生も、「こうした生きた学びというのが目に見えて分かるのが、音楽の授業ならではのもの」とおっしゃっていた。

そういえば、数学は自分の思いを話すという機会は少なく、このような音楽の時間が新鮮であった。こうした自分の思いや考えを共有する時間というのは、芸術分野独特なもので、数学の授業にも少し取り入れたいと考えるようになった。

その後、数学以外の授業を見てきて、生徒の私への対応が誰？から毎週来る人のような認識になってきたと感じる。「先生、〇〇先生どこですか？」と聞いてくれたり、「先生、トイレ行きたいので少し朝の会遅れます」のような業務連絡をしてくるようになった。雑談のような会話はすることはほとんどないが、話しかけてくれるようになったのがうれしく感じる。こうした少しずつ生徒との距離が近づいていくことを大切にしたいと思った。

5月のカンファレンスでは、学校での協働研究を踏まえて、これからの展望を開くということで、これからの授業で求められることということをお話した。主体的・対話的な授業というのが求められているが、高校ではまだ講義型の授業をおこなっていることが多いと感じている。しかし、講義型の授業なら講義型の授業が極めてうまい人の授業を録画して、それ

をオンデマンドとして流せばよいのではないかという話が出た。確かにそれは生徒にとってその場で理解することにつながるかもしれない。しかし、それでは生徒同士で話したり、考えたりすることで得られる学びがない。音楽の時間に感じた「生きた学び」を数学の授業でどう実践できるかをこれから考えていきたい。

生徒の学びと私の学び

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井県立丸岡高等学校 酒井 俊典

本年度に入ってからインターンでの自分の環境が大きく変わった。メンター教員の変更やそれに伴った配属クラスの変更、校務分掌への参加と気合いを入れるには十分すぎる変化だ。新しいメンター教員は1年学年主任と言うことで、1年生と新たな春を迎えることとなった。

そんな中でも特に大きく変わったのが授業への参加の仕方、自分の立ち位置だと思う。メンター教員の授業ではT2として、生徒の質問に対応することが多くなった。そのため、生徒の授業での様子を見取ると言うことが昨年以上に難しくなったと思う。見取りの難しさを感じた私は関係づくりのために、休み時間やホームルームの時間、放課後と言った授業外の時間で生徒との関わりを強めていこうと考えていた。この取り組みが功を奏し、生徒から話しかけてきたり、悩みを相談してきいたりする場面が日に日に増えていった。

もう一つの授業での変化は昨年以上に深く、濃く「総合的な探究の時間」の授業に参加することになったことだ。昨年度までは主となる先生の補助役として授業に参加することがほとんどだった。しかしながら、本年度は担当の生徒8人を抱えてグループの主担当として生徒の探究に関わることとなった。1年生の探究では身近な困りごとからそれを解決することを大きなテーマとして探究を進めていく。私の下に集まったのはまちづくりをテーマにした8人だ

った。そんなある日の探究の時間で丸岡のまちにフィールドワークに出かけることになった。

私のグループは高椋コミュニティセンターで坂井市の職員の方にインタビューすることが決定した。まちづくりを実際に行っている大人の方に話を聞く機会は非常に貴重な機会である。事前に準備していた質問を市の職員にぶつける中で、新たに疑問が生まれる生徒や他の生徒の質問からヒントを得る生徒、そもそも自分のこと以外は興味のない生徒と様々だった。

インタビューを終えた生徒を見ていた私は肌感で探究活動が“できる”子と“できない”子に差があることを感じ取った。この当時はこの感覚に近い何かを言語化することができなかった。

しかしながら、今回のカンファレンスでの語りを通して、なんとか他の先生方に伝えようとした結果、“できる”子はその先の見通しが持てる子、“できない”子は見通しが持てない子という言い回しで表現したのだった。自分でもこのときに何故言語化できたのかは不思議ではない。ただ、この言語化から得られたことは大きかった。

言語化したことで、“できない”子がどこにつまずいているのかがはっきりした気がする。“できない”子が見通しを持つためにはどのような支援があるだろうか、どのような伴走の仕方があるだろうか、つ

まずきから自分の立ち回り方を考えるきっかけになったと思う。確かに、探究のプロセスの中では見通しや振り返りと言った幾重ものサイクルを回しながら進めていくことが重要であると考えているため、このカンファレンスが生徒の探究に伴走するというテーマの自分の探究を振り返り、見通しを立てる大き

なターニングポイントとなった。サイクルの中で成長する私の体験を実態に合わせて最適化した形で生徒に還元できればと考えている。ここでの気づきを忘れることなく、任せてもらった生徒の一助になるように頑張りたいと新たに決意するカンファレンスとなった。

カンファレンスが支える私の学び

ミドルリーダー養成コース2年/奈良女子大学附属幼稚園 穴戸 佳央理

教職大学院での学びが2年目となり、大学院という場、コミュニティが、私の保育実践を支えていることを改めて実感している。

教職大学院のカンファレンスやラウンドなど、日常から離れたコミュニティで実践を語ることで、それは実践を捉える距離が変わるということだ。距離が変わると、見方も変わる。校種をこえた多様な人と対話することで、新たな見方考え方に気付いたり、意味を見出したりするなど、これまでは見えなかった景色に出会うことができる。

5月は、昨年度大学院を修了された先生の長期実践報告を通して語り合う機会があった。高校の探究学習の実践で述べられていた「探究ごっこ」という言葉。まだ本物には至っていない幼きものとして表現する「ごっこ」と幼児教育でよく使われる学びとしての「ごっこ」の差異を話題にした。それぞれの違いは何か。なぜ使う文脈によって違うのかという問いが立ち上がった。

参加していた先生方がそれぞれの捉えを語ってくれた。「(真似事として)上に向かって「ごっこ」と下に向かって「ごっこ」がある。立場が変わると違うのではないか」「自己認識と身体性が一致していない。その間を埋めていくためのものなのではないか」「真似ることによって獲得していくことがある」など、ここにすべてを書き残すことはできないくらいの校種や立場を超えた様々な考えに触れることができた。

最近、本園では、遊びを語るときに「ごっこ」という言葉を使わなくなってきた。カンファレンスに参加していた園の先生方とその背景について語り合う中で、私自身はその言葉をどのように理解しているのかを改めて考えていた。毎日の保育記録を振り返ると、遊びの姿を語る時に、〇〇ごっこと語ることと、あえてそう語らないことがあることに気付く。以前は「ごっこ」は当たり前に使っていた言葉であり、遊びを語る時はそう表現するものだと考えていた。しかし、子どもたちと実践を創る過程で、何かの真似をしたり、本物に近付いたりするというのではなく、子どもたちが一人の人として物事と向き合い、心動かしながら、新しい意味を生み出していく瞬間に出会ったとき、すべてを「ごっこ」というフレームでくくることへの違和感をもつようになったのかもしれない。これは何が正しいかではなく、現時点での捉えである。今後学び続ける中で変わっていくのかもしれないが、今、自分はどうか考えているのか、学びの痕跡を残しておくことが次の実践につながるのではないかと考えている。

当たり前に使っていた言葉を異なる視点で考えると、その差異に気付いていく。これは、教職大学院や園内外の研修で、言葉のもつ背景を捉え直してきたからだ。教職大学院には、当たり前を問い直していく過程がある。何のためのものなのか、何が見出されているのかを語り合い、問い直していく過程で、豊かな意味が生まれていくとき、私は対話の面白さを体感

する。今年度は、長期実践報告を書くことになる。教職大学院で変容してきた自らの学びを丁寧に振り返っていききたい。

一方で、一つの言葉の解像度をあげていくと、その他の価値観が見えにくくなることがある。5月のカンファレンスで先生方と対話し、私は一つの実践を、

立ち位置（立場や場を）を変えずに、多様な見方をすることがまだできていないことに気付いた。意図的に自らの見方を変えていくことで違う世界が見えてくるのかもしれない。その豊かさを探究していくために、教育という分野にかかわらず、多様な人とともに考える姿勢をもちながら、今後も学び続けていきたい。

霧は晴れるか

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校 高橋 美幡

教職大学院で学び始めてから1年が過ぎた。1年目で得た気づきを2年目の自分は還元できるだろうか。教える・教えられるのが目的ではなく、学び合うことが大切だとはいえ、4月のカンファレンスでは自分がうまく作用していたとは思えない。そんな不安や焦りを感じながら参加した5月のカンファレンスであった。

午前中前半の実践報告は法政大学中学高等学校の石川秀和先生。自分の所属校と同じ私学の中高一貫校ということもあってか、共感する部分が多くあった。中でも教員について、「やっているようでやっていないことがある。自分のやり方を見直しにくい。」と仰っていたが、これは特に最近実感していることである。今年度から学年団の先生方と一緒に総合的な学習の時間を進めているので、自分一人では気付けなかったことをご助言いただくことも多く、授業を開くこと・相談することの意義を日々感じている。また、生徒の特長として「指示通りにやれてしまう“ように見える”」と仰っていたことが印象的で、できていない生徒へのフォローはできたとしても、できているように見える生徒へのフォローはきちんとできているのか、見落としていることがあるのではないかと考えさせられた。

午前中後半のグループセッションでは現状報告を行った。今年度から中学1年生の総合的な学習の時間の主担当となり、学年団の先生方と一緒にプログラムを進めている。総合的な学習の時間といっても、

いわゆる探究的な学習に割ける時間は年間30コマもない。前期は中1のテーマである「福祉・人権」に関連する講演会や体験等でイメージをつかみ、後期は「福祉・人権」に関する課題を個人またはグループで設定して探究サイクルに基づきまとめたことを発表する計画である。表現方法は自由とし、ポスター・動画・絵本など自由な表現方法でまとめてもらう予定だ。4月のカンファレンスでは「福祉・人権」というテーマは小学校でも経験しているはずなので、計画も含めて最初から全て生徒に任せてはどうかとアドバイスをいただいた。生徒主体でできるようにプログラムをたてたつもりでいたが、全くできていなかったことや、小学校時代の経験をあまり考えていなかったことを反省し、その後すぐに系列小学校の総合の授業を見学させていただき、再度構成を考え直すことにした。小学校の総合ではテーマの決定・計画・実行まで全て児童が主体的に組み立てている。私が見学した時はまさにテーマを話し合っている最中であったが、担任の先生は時々合いの手を入れるものの誘導することはなく、プロセスを大切に展開されているようだった。後で先生にお話を伺うと、テーマ決定に秋までかかったこともあるという。学年の約三分の一の生徒はこのような経験を積んだ子どもたちであることを念頭に置いてプログラムを練る必要性を感じた。小学校の経験・学び・気づきを退化させてはならない。しかし中学・高校ではアカデミックな要素も求められるため、多少コントロールしながら進めなくてはならない部分もある。例えば課

題を設定するためには情報収集が必要であるが、そのためには本・雑誌・新聞・Web サイトなど、情報源の特性を理解したうえで情報を収集していかなければならない。小学校でも本やインターネット等を使って情報収集を行っているだろうが、その扱いは学校や先生によって差があるように思う。本の探し方はもちろんだが、読むべき本の選別ができずにいる生徒を見ていると、そうしたスキルを学ぶ時間も設けた方がよいように感じる。最初から生徒主体で進めるとその点の指導が難しい。そこをいかにうまく取り入れていくか、その塩梅がまだつかめていない。そんなもやもやとしたまともまらない気持ちをそのままグループセッションで吐露すると、「徐々に手放せばよい」「いくつかの選択肢の中から選ばせるのもよい」とのアドバイスをいただいた。この先5年間（生徒によっては6年間）続く探究活動の1年目で

ある。小学校の流れを踏襲しつつ、より高度な探究スキルを身に付けさせるために最良の道を模索しながら進めていきたい。

午後は「求められる学習と変わる試験問題」というテーマで展開された。検討資料の中にお茶の水女子大学の総合型選抜（新フンボルト入試）が含まれていたが、文系は図書館を活用して小論文を作成するというユニークな選抜方式で、図書館司書としてはかねてより注目していた。VUCA 時代、情報の収集能力や取捨選択能力が問われる中で、図書館活用スキルはその一助となる。そんなスキル伝授の使命感を抱きながら、私はこれからも主体性とのバランスを探っていくことになるであろう。

実践報告(話題提供経験)を経て

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立勝山高等学校 松田 奈々

大学院生活が2年目に入った。4月カンファレンスでは、出発のサイクルとして今後の展望について話しながら、自分の実践をどのように進めたいのか、じっくり考える機会となった。その気持ちを形にしたいと考えつつ過ごしていた数日後、5月カンファレンスの話題提供をしてみませんか、と声を掛けて頂いた。現在勤めている学校では、総合探究活動が盛んである。周りの生徒たちが自分の個人探究を考え、深め、発表し、振り返り、また進める様子を見習って、資料作りや練習など、事前準備に努めた。発表内容を事前に聞いていただいた教頭先生には「流れはいいと思う。楽しんでおいでね」と背中を押していただいた。

しかし、当日は、なぜか嫌な予感がした。実際発表していると、自分のことなのに、自分のことを伝えている感じがせず、聞いている方へ向けて話をしようと準備したはずなのに、思ったように話ができない

自分に焦りを感じて発表が終了した。ちっとも楽しくなれなかった。悔しい。

発表後、大学院入学前からの私の様子を知っている先生が、へこんでいる私を見て、笑いながらこんなことを言われた。「5年前のあなたを見ているようであった。自分のことで精一杯な姿で、オーディエンスを意識した発表ではなかった」と。図星であった。自分でもそう感じる。本当は、オンライン参加の方や、東京会場の方の様子も感じながら、対面の皆様の顔を見ながら、対話しながら発表したかったのである。そのつもりで事前準備に努めていた。では、こんなにも準備したのに、なぜこうなってしまったのか。5月カンファレンスが終わり、ひと月ほど経ってニューズレターを執筆するときに振り返ってみようと思っていた。さて、落ち着いて考えてみると、「一番言いたい核となる部分を念頭に置いて話することを意識出来ずにいて、だから不完全燃焼になってしまった」と気付いた。「話題提供として、何がしたかった

のか」とも思った。本当は、どうしたかったのか。4月のカンファレンスで見えてきた実践の展望、「対生徒」「対同僚」とのコミュニティの構築について模索したいという、自分の考えを伝えなかった。相手に対する言葉の掛け方、程よい接し方、自分が若手からミドルリーダーへどのように変化するのか。自分の立ち居振る舞い、それによって自分に関わるコミュニティがどのように変化していくのか。そのために必要な視点や考え方について参加した方々と意見交換がしたかった。先程の先生には、もう一つこんなことを言われた。「話題提供の中にあつたように、昔はよく尖っていたね。自分が正しいと思って行動していたのであろう。それは自分の考えが揺らぐことを恐れていたからではないか。ここ最近はいい感じにブレていて、ゆるやかである。それがいい。でも、発表の中では、そのゆるさが出ていなかった」と。昨年の夏の集中講座で、とある先生が、「分析力が高いですね」と言ってくださったことを思い出した。今回の話題提供の資料を事前に見ていただいた大学院スタッフの先生には、「このまま長期実践記録に使いそうです。当日は原稿を読み上げるのではなくあくまで参考程度と考えて、その時思い浮かんだ自分の言葉を紡いで楽しく話してもらえるといいなと思います」と言っていた。こんなにもヒントはあつたのに、それなのに、話題提供時の自分自身は、「準備したことを伝えなければ」という思いで精一杯であった。要するに揺らぐことを恐れたからで、いい感じのブレが無かった。資料作りに関する分析力は意識できていたのに、肝心の「自分の言葉を紡ぐ」という部分がおろそかになってしまった。

昨年大学院へ入学した頃、とある先生に、「どのように大学院での学びを進めていくといいのかについて不安なんです」と相談していたとき、「あなたが思う、楽しい授業ってなんですか。どんな授業をしたら、どんな風に子ども達に接したら子ども達は楽しいですか」と聞かれた。そのとき自分は、「自分の実生活に繋がっていると実感できるような授業をすること。学んだことが生活の上で役立っているなど子ども達がわかったとき、楽しいと感じると思う。学校であった出来事を家に帰って家族に伝えるというのは楽しい証拠、大人になってもふと思い出せるような状況になることを意識して接したい」と答えていた。そのとき、その先生は「子ども思いの先生だなと感じる。今の自分を素直に言葉にしてレポートに残しておくこと。素直に綴っておくほうがよい」とアドバイスして下さった。また、こんなことも続けて話された。「人は、3割は意識したことをもとに行動しているが、残りの7割は無意識に行動している。その7割の中に自分が大事にしている核となる想いや考えがある。大学院での学びをきっかけに自分の無意識の中にある大事な部分に気付けるよう、意識して行動して見つけられるといいね」と。

5月カンファレンスの経験は苦い思い出となったが、ポジティブに捉えるのならば、これも今後の自分にとってふと思い出せる経験となったのならば、良いではないかと思うことにしたい。こうやって省察を繰り返していく中で、自分の無意識の中にある想いや考えに気がつくことがあるはずだから。

5月カンファレンスでの気付きとその後

学校改革マネジメントコース2年/彦根市立城東小学校 平中 理恵

教職大学院で学ぶ2年目を迎えて1か月。5月18日のカンファレンスA日程に参加したが、その10日

後に、研究指定をいただいている「幼保小の架け橋プログラム事業」の公開研修会（研究公開）を控えてお

り、カンファレンスのため大学に向かう道中でさえ、頭は公開研修会のことではいっぱい。心ここにあらず、に近い状態だった。

しかし、カンファレンスが始まり、1つ目のセッション（それぞれの学校で動き始めた状況について語り合い、捉え直して展望をひらく）で一緒になった院生の方の話の話を聞くと、一気に心が開いていくような感覚があった。インターンで行っている学校で出会った子どもへの関わり方で悩んでいたり、授業で子どもが一生懸命やるけれど受け身だということに悩んでいたりと、といった話を聞かせてもらううちに、「あ、私の学校の初任者の先生も子どもへの接し方で悩んでいたな」「一生懸命だけれど受け身、というのは、まさにうちの学校の子どものと同じ！」と所属校との共通点がたくさんあることに気付いた。グループのメンバー2人の姿や言葉を通して、所属校の先生や子どもたちの姿が浮かび上がるようだった。そして、「校内での初任者研修の時間に、初任者さんにもこんな風にゆっくり話を聞いてみよう。『指導』ではなく、どうしていこうと思っているのか本人が話すのを待ってみよう」とか、「『〇〇したい』という子どもの思いをもとに学びをつくらうとしている校内研究は、間違っていないな」といった思いをもつことができた。特に初任者の先生への関わりについては、自分自身のこれまでの関わり方に反省しきりである。

「よし、また頑張ろう！」という思いをもって5月のカンファレンスを終えることができたが、週明けの月曜日からは、日常の業務に加えて、冒頭でお話した公開研修会に向けての準備が佳境に入り、もうてんてこ舞い（久しぶりにこの言葉を使いましたが、まさにてんてこ舞いでした…）。先生方とゆっくり話をするどころではなかった。県教委や市教委で本事業を担当してくださっていた先生方も異動になり、新しい担当の方と十分に連絡や相談ができていなかったのも、てんてこ舞いの原因の一つだったかもしれない。今振り返ると、相談すれば本当はもっと力を貸していただくことができたのかも、という思いも浮

かんでくる。しかし、そのときは必死すぎてそれどころではなかった。それでも、なんとか学校や園の先生方と一緒に公開研修会を終えることができた。翌週には、研修会当日には授業を見られなかった自校の先生方と、当日の授業の様子を撮影した動画を見て協議する、という形での校内授業研究会をもった。先生方も刺激を受けられ、自分たちももっとやっぴこ、単元の組み立てや子どもへの声のかけ方を変えていこう、といった前向きな振り返りを書いてくださった。公開研究会にむけての準備は確かにしんどかったが、先生方が前向きな気持ちをもってくださったり、取組の次のステップが明らかになったりするなど、得られたものも大きかった。

6月末には、校内授業研究会として4年生が授業を提供してくれた。この授業研究会に向けて、グループで指導案検討を行ったほか、授業者が直接相談に来てくれたので、2人で一緒に授業について考える時間をもつことができた。授業後の研究協議も非常に活発に意見が交わされるなど、先生方が自ら気付き学んでおられる。少しずつ変わってきた、そんなことを感じている。

また、この授業研究会やその指導案検討会には、同じ彦根市内にある小学校からも先生が複数参加されている。その学校とは、『校内研交換留学』を行っているのだが、そのつながりをベースに、学校の枠を超えた「サークル活動」として勉強会を継続して開催しようと計画している。活動の輪はごく小さなものである。しかし、続けていくとその輪が波紋のように広がり、別の波紋と重なり合って違う模様を作り出すだろう。また、この輪の中にいる私以外の誰かが自分の学校で何かしらの取組を始めたとき、それは別の波紋の始まりである。

一歩ずつ、しかし、確かな一歩を積み上げていきたい、5月の月間カンファレンスを経て取組が少し進んだ今、改めてそのような思いをもっている。



連合教職大学院 近況報告

運営協議会実施報告

福井大学連合教職大学院 准教授 **山浦 光雄**

5月14日、福井大学総合教職開発本部の運営協議会及び連合教職開発研究科の運営協議会が、オンラインにて開催されました。

運営協議会は、総合教職開発本部及び研究科それぞれの運営や事業計画について協議する会であり、メンバーは県内外の教育行政機関の長、拠点校、連携校の校長によって構成され、例年5月と3月の年2回、開催している会です。

当日は、福井県の豊北教育長からご挨拶・メッセージをいただいたほか、松本総合教職開発本部長、木村連合教職開発研究科長が挨拶を行い、令和6年度の計画について協議が行われました。会議には、県外からの参加者10名を含む教育委員会、学校、こども園など多様な機関からの関係者44名が参加されました。その後、大学スタッフを加えて6つのグループにわかれ、ここまでの協議を受けて感じていることや、それぞれの職場で取り組んでいることについて等の情報交換が行われ、各県、各職場での、具体的な取組から学び合うことができました。

県内外の、教育に携わる皆様のコミュニティーが育まれていく場、という意味合いにおいても、この運営協議会を大切にしていきたいと、会を運営する中で、あらためて感じました。

次回、第2回は、3月13日（木）に開催の予定です。

令和6年度第1回		当日レジュメ														
福井大学総合教職開発本部運営協議会並びに 福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科運営協議会、同教育課程連携協議会																
1 日時	令和6年5月14日（火）13:00～15:00															
2 会場	WEB会議システム（「Zoom」にて開催）															
3 内容	（1部）（連合教職開発研究科運営協議会・教育課程連携協議会） 13:00～13:05 連合教職開発研究科長あいさつ 13:05～13:15 福井県教育庁豊北教育長あいさつ 13:15～13:25 全体協議 令和6年度年間計画等について （2部）（総合教職開発本部運営協議会） 13:25～13:30 総合教職開発本部長あいさつ 13:30～13:40 全体協議 1 令和6年度年間計画について 2 教員養成フラッグシップ大学の進捗について 3 その他（次回第2回運営協議会3月13日（木）） 13:40～13:50 休憩 （3部） 13:50～15:00 グループ別協議															
4 グループ	<table border="1"> <thead> <tr> <th>グループ</th> <th>所属（学校名、教育委員会名）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>福井教育庁教職員課（1名） 福井教育庁義務教育課 嶺南教育事務所 福井県教育総合研究所 特別支援教育センター 独立行政法人教職員支援機構</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>福井教育庁教職員課（1名） 岐阜県羽島市教育委員会 長野県岡谷市教育委員会 富山県教育委員会 福井市教育委員会 大野市教育委員会 勝山市教育委員会</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>福井大学附属義務教育学校前期課程・後期課程 福井市立至民中学校 福井市立中藤小学校 福井市立安居中学校 美浜町立美浜中学校 福井県立福井東特別支援学校</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>福井市立松本小学校 越前町立四ヶ浦小学校 福井市立明倫中学校 岐阜市立柳津小学校 岐阜市立市橋小学校 岐阜市立加納中学校</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>福井県立高志高等学校 福井県立若狭高校 福井県立若狭東高等学校 富山国際大学付属高校 福井商業高校 東京都板橋区立赤塚第二中学校 葛飾区立常盤中学校 同志社中学校</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>森田さくらこども園 福井俊成幼稚園 まごころ認定こども園 福井大学教育学部附属幼稚園</td> </tr> </tbody> </table>		グループ	所属（学校名、教育委員会名）	1	福井教育庁教職員課（1名） 福井教育庁義務教育課 嶺南教育事務所 福井県教育総合研究所 特別支援教育センター 独立行政法人教職員支援機構	2	福井教育庁教職員課（1名） 岐阜県羽島市教育委員会 長野県岡谷市教育委員会 富山県教育委員会 福井市教育委員会 大野市教育委員会 勝山市教育委員会	3	福井大学附属義務教育学校前期課程・後期課程 福井市立至民中学校 福井市立中藤小学校 福井市立安居中学校 美浜町立美浜中学校 福井県立福井東特別支援学校	4	福井市立松本小学校 越前町立四ヶ浦小学校 福井市立明倫中学校 岐阜市立柳津小学校 岐阜市立市橋小学校 岐阜市立加納中学校	5	福井県立高志高等学校 福井県立若狭高校 福井県立若狭東高等学校 富山国際大学付属高校 福井商業高校 東京都板橋区立赤塚第二中学校 葛飾区立常盤中学校 同志社中学校	6	森田さくらこども園 福井俊成幼稚園 まごころ認定こども園 福井大学教育学部附属幼稚園
グループ	所属（学校名、教育委員会名）															
1	福井教育庁教職員課（1名） 福井教育庁義務教育課 嶺南教育事務所 福井県教育総合研究所 特別支援教育センター 独立行政法人教職員支援機構															
2	福井教育庁教職員課（1名） 岐阜県羽島市教育委員会 長野県岡谷市教育委員会 富山県教育委員会 福井市教育委員会 大野市教育委員会 勝山市教育委員会															
3	福井大学附属義務教育学校前期課程・後期課程 福井市立至民中学校 福井市立中藤小学校 福井市立安居中学校 美浜町立美浜中学校 福井県立福井東特別支援学校															
4	福井市立松本小学校 越前町立四ヶ浦小学校 福井市立明倫中学校 岐阜市立柳津小学校 岐阜市立市橋小学校 岐阜市立加納中学校															
5	福井県立高志高等学校 福井県立若狭高校 福井県立若狭東高等学校 富山国際大学付属高校 福井商業高校 東京都板橋区立赤塚第二中学校 葛飾区立常盤中学校 同志社中学校															
6	森田さくらこども園 福井俊成幼稚園 まごころ認定こども園 福井大学教育学部附属幼稚園															

教員研修の高度化モデル開発事業報告

～④校内研修支援とデジタル技術活用指導主事訪問～

福井大学連合教職大学院 教授 清川 亨

文部科学省は、令和4年に教育公務員特例法が改正されたことを受け、令和5年4月から研修の記録と当該記録に基づく対話と奨励を行う「新たな教員研修制度」の開始に当たり、教員研修の合理化・効率化に資する研修高度化に向けた取組を推進するため多様な主体（教育委員会・大学等）の協働によるモデルを開発し、成果を広く普及することで全国的な研修観の転換・定着を図ることを趣旨とした事業を立ち上げ、令和5年3月に公募を行った。このモデル開発事業は、次の4つのテーマについて教員研修の高度化モデルを開発するものとされた。

- ①教員研修の成果確認と評価モデルの確立に関すること
- ②教員研修や授業研究等の高度化に関すること
- ③教師と管理職の対話と奨励におけるプロセスの最適化に関すること
- ④デジタル技術を活用した指導主事訪問の高度化や各学校の研修主事への支援など、教育委員会と教育センターによる学校へのサポート機能の充実に関すること

本学教職大学院からは①、②、④を申請し、いずれも承認された。今回は④で取組んだ内容の概要と、その実践から見えてきたことのうち何点かを報告させていただく（詳細は成果報告書をご覧ください）。<報告書資料参考 URL < <https://www.gpdt.u-fukui.ac.jp/department/regional/kodoka/> >

なお、御協力をいただいた福井県教育委員会・参加校の皆様、本学の小林溪太先生、中森先生、森田先生をはじめとした先生方および事務の方々に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

課題認識

事業申請時の校内研修等に関する主な課題認識は次のようである。

○多くの学校が抱える校内研修の今日的課題

- ・校長や研究主事自身のこれまでの経験に基づいて行われており、今日求められている学習者主体の教育への転換や、超スマート社会における教育の知見等を研修に反映できないでいる。
- ・校長や研究主事が学校単独で校内研修を考えるなど、研修に関する情報交換が学校を超えて行われることがなく、教師の資質能力育成の視点からのメタ認知がなされていない。
- ・令和の日本型学校教育で校長に求められるアセスメント能力とファシリテーション能力を身に付けた指導者が少ないため、研修自体が目的化したり、形骸化した研修になってしまったりしている。
- ・対面あるいはオンラインでの研究会では発言をする者が限定的になりがちで、いろいろな考えや気づきがあっても発言できずにいる参加者が多い。

○指導主事訪問が抱える構造的課題

- ・指導主事としての研修を積んで指導主事になるわけではなく、県内には指導主事対象の研修会もない。そのため、経験の浅い指導主事の場合、自身が知る指導主事のイメージで業務を遂行することが多い。
- ・1回の学校訪問で来校する指導主事は少なく、教職員が多様な意見を聞くことができていない現状がある。
- ・指導主事は異校種、異教科の指導主事と共に子供の発達を見据えて学ぶ機会が少ない。

- ・指導主事の学校訪問では、移動に多くの時間を要する場合がある。オンラインの研究会も散見されるが、オンラインでも児童生徒を見取ることができる授業観察の手法や、資料共有の点でも優れ立場の違いを気かけずに発言しやすいメタバースを用いた研究会の実証や研究開発は進んでいない。
- ・学校によっては、大学教員が参加して授業研究会を行っているケースもあるが、通常、大学教員は指導主事訪問と無関係であり、学校への指導やサポートの方針に混乱が生じることがある。

このような課題認識を持って取組んだ事業の目的・概要等は次のとおりである。

1. 多くの学校が校内研修を試行錯誤しているが、伝達型から協働的で主体的・対話的で深い学びの校内研修への転換を図り、相似形である児童生徒の学びの転換も図る。福井県教育委員会と福井大学教職大学院が協働で支援し、省察と実践の往還を進める校内研修支援システムを構築する。また指導主事・大学教員からなるチーム研修コンシェルジュを立ち上げ学校の研修を支援する。
2. 指導主事や教職大学院教員の移動時間削減と、所属を超えた指導主事や教職大学院教員が複数参加できるオンラインによる効果的な授業参観や研究会の汎用性のある方法を研究開発する。

①授業参観：360度カメラを用いて、遠隔参観者が児童生徒を見取れる方法を蓄積する。

②授業研究会等：多様な意見が出やすく多層の資料を共有できる特性を生かしたメタバースによる実効性の高い研究会等の実績を重ねる。

事業の実績

福井県教育委員会及び福井県内各市町教育委員会を通じて、県内公立小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に対して協力校の募集を行い、「校内研修支援校」28校、「デジタル技術活用支援校」19校の参加があった。本事業には、福井県教育委員会からは、本学との協定による併任者を中心に参加があり、ま

た市町教育委員会の指導主事もデジタル技術活用による授業参観に参加した。

1. 校内研修支援

(1) 校内研修カンファレンス

学校から校長・研究主任等、県教育委員会からは指導主事等が参加して校内研修合同カンファレンスを実施した。カンファレンスでは、校内研修に係る国や県の動きを再度確認するとともに、学校種や地域を解いた数校からなるグループでのセッションを行い、校内研修に関する省察を深めた。カンファレンスのグループセッションでのファシリテーターは主に校長や指導主事が務め、教職大学院スタッフはそのサポートを行いファシリテート能力の向上を支援した。

参加校を対象とした校内研修カンファレンスに加え、主に勤務1年目の指導主事を対象とし、勤務に対する不安感の解消と意欲向上を目的とした指導主事カンファレンスを実施した。また、参加校から学校の1人職である養護教諭が語り聞きあう場をとの要望があり、養護教諭を対象としたカンファレンスを開催した。更に、校内研修合同カンファレンス等で、研修時間が取れない等の話題が多く上がったことから、教員の働き方改革を視点とした特別カンファレンスも開催した。

	開催日	参加者数
指導主事カンファレンス	R5.7.28	41名
第1回校内研修合同カンファレンス	R5.7.28	12名
第2回校内研修合同カンファレンス	R5.10.16	34名
第1回養護教諭カンファレンス	R5.11.17	4名
特別カンファレンス	R5.12.2	82名
第2回養護教諭カンファレンス	R6.1.19	7名
第3回校内研修合同カンファレンス	R6.1.26、2.26	34名

3回の校内研修合同カンファレンスでは、第1回はそれまでの、第2回、3回は前回のカンファレンス後の校内研修に係る実践について語り聞きあうという主体的対話的で深い学びを参加者自身が経験することで、自校および自身の校内研修に係る省察を進めていった。この校内研修合同カンファレンスを重ねる中で、校内研修に対する参加者それぞれの理論化が進んだ。更に、参加校において管理職と研究主任等

が対話を進めることで知識伝達ではない研修参加者が当事者意識をもつ研修への転換が試みられ、ほとんどの参加校で校内研修の高度化が進んでいった。

(2) 先進校視察

福井県関係各課指導主事や校長等と教職大学院スタッフがチームで県外先進校研修を行った。訪問先の教育委員会は、順に東京都世田谷区、沖縄県、埼玉県戸田市、山形県天童市、徳島県海陽町・鳴門市、熊本県、札幌市の7地域である。視察では教育委員会スタッフ（視察先により教育長も含む）、訪問校管理職や研究主任等との協議や情報共有を行い、帰県後の参加者個々の業務への反映やセクトを越えた業務推進だけでなく、校内研修カンファレンスや研修コンシェルジュでの指導・支援に反映することを目指した。単独の、あるいは同じ所属での視察に比べ、多様な参加者により多角的な気づきや深い省察で視座が変わり、指導主事としての業務遂行に厚みが加わった。また、視察後も所属を越えた情報共有や意見交換が継続された。

(3) 研修コンシェルジュ

学校現場からの相談などの支援を行う場として「研修コンシェルジュ」を設置した。研修コンシェルジュは「Chatwork」のチャットツールを使用した。参加校の校長先生や研究主任の先生方などに加え、福井県教育庁関係各課や教育総合研究所などの教育センター、福井大学教職大学院のスタッフ等94名が名参加し、チャット件数は9月1日～3月20日現在で252件であった。開設当初は、県教育委員会や大学関係者が回答することを想定して進めたが、徐々に学校からの参加者の経験・知識・情報が共有されるものとなった。やり取りを閲覧しているだけの者にも刺激を与え、コンシェルジュへの参加の形に応じてそれぞれの学校の校内研修等に影響を与えた。また、まさしく学校が求めている情報を共有しやすくした点で意味のある取組となり、参加者のそれぞれの状況に応じた最適な学びを助けたものとなった。

(4) アンケート結果

参加校教員を対象に事業開始前後に実施したアンケートでは、「校長のファシリテーション能力が向上した」が63%から86%（校長）に、それに伴い研修だけでなく学校経営の在り方が指導管理的な経営からチーム学校を生かし成長させる経営へと変化したのが84%から95%（校長）に上昇した。また、教員目線に立った支援で教員のより最適な学びを助けているが91%（校長）に、教員の主体的・対話的で深い学びが進み、相似形である児童生徒の学びが主体的・対話的で深いものになっているが87%（教員）に上昇した。

2. デジタル技術活用指導主事訪問

360度カメラやメタバースを使用しオンラインで実施することによって、児童生徒を見取ることができる授業観察や、授業で撮影した児童生徒の見取りのデジタル記録により研究会参加者が多面的に思考することができるとともに、児童生徒を中心に据えた授業への転換、更に、一人一人の子供を主語にした学校教育の実現を図ることを目的とし、授業のオンライン参観・授業研究会の研究開発を行った。オンライン参観・研究会には、複数の指導主事や大学教員が参加した。360度カメラやメタバースなどを使用することによって、現在よく使われている平面的なテレビ会議システムでは難しい臨場感のある授業観察や、参加者自らが観察する視点を選択することができ、それに基づく助言が可能となった。

(1) ICT 環境調査

1) デジタル技術活用支援校

機材環境（必要PCスペック：Corei5以上GPU有）の確認を行ったところ、ほぼすべての学校で必要スペックを満たすPCを保有していなかった。これはOfficeソフトの活用しか意識されてこなかったとみられる。そのため、PCや関連部品等も含めて機材の貸与を行った。また、ネットワーク（必要スピード：Upload20Mbps以上）についても、ほぼすべての学校で、ルーターの近くなど速度の出やすい教室を探せばかろうじて教室確保できるという程度で十分な

環境ではなかった。さらに児童生徒がいない時間での調査であったため、時間帯によってはネットワークが繋がらない状況であった。おそらく自治体のケーブルの線自体が細いことが要因のため、根本の解決はできず、現状の環境のまま実施した。教員の ICT スキル (必要スキル: ライブ配信のスキル) は、OBS の活用やライブ配信経験のある教員が数名いたが、ほとんどは経験が無かった。そのため、配信に関する研修会の実施及び、配信に関するマニュアルの作成など配信のサポートを行った。

2) 指導主事の参加

教育委員会では、指導主事が十分なタブレット端末を所持していなかったり、市町ごとに端末や OS が異なるため、学校と同じ環境での指導が行えていなかった。オンライン授業配信、研究会の協働実施のため、県に対して端末を貸与し「小中学校タブレット端末活用モデル事業 (47 校)」および「英語教育推進事業 (10 校)」において、児童生徒一人一人の協働的な学び・個別最適な学びを実現するために、教員の授業づくり支援に活用した(約 160 回の訪問に活用)。その結果、各学校と同様の環境で指導・助言が可能となった。また、授業後の研究会でも活用し、子どもの見取りを動画や写真等で共有することが出来た (143 校で活用)。ほぼ毎日活用すると回答した学校が 20.3% から 41.2% に、週 3 回以上活用すると回答した学校が 70.3% に向上した。

(2) オンライン授業配信、研究会

「デジタル技術活用支援校」19 校でオンライン授業配信、研究会を実施した。それらの成果と課題、今後の展望は以下のとおりであった。

- ・360 度カメラで授業全体の様子を捉えることができ、ハイラブル (話し合いを見える化するツール) で全グループの音声を拾うことができた。
- ・指導主事の専門ではない教科や学年で、どのような授業がなされているのかを把握できるのは非常に画期的であるとの声をいただいた。
- ・ICT 機器を活用した授業のイメージを共有するという点でも有効であった。

- ・机間巡視中に視線がなかなか他の児童生徒の様子を確認できるなど、授業者の授業の振返りに活用ができ、効果的との声があった。
- ・授業研究会でのエビデンスとしての活用などで、高度化に資するとの声があった。
- ・特別支援学校において、参観者全員が別室で 360 度カメラ配信による授業参観をすることで、児童生徒が緊張することなく学習に取り組むことができ、普段の様子を見ることができると好評であった。
- ・一人ひとりの子どもの様子に意味づけし価値づけ (見取り) ができるかというところがかなり難しい。
- ・タブレットを子どもたちが活用している、活発な議論が出来ているなどは分かるが、子どもの詳細な活動までは読み取れない。
- ・子どもの手元も含めた映像を共有したり、現地で教員が意味づけし価値づけした情報 (メモなど) を視聴者側と共有するなど情報を増やしてどこまで見取りが可能か検証していく必要がある。
- ・自治体の壁を越えた授業が蓄積されるため、指導主事の力量形成には有効であることがわかった。一方で、遠隔で子どもの変容に注目したり、子ども主体の授業研究会を行うには、子どもの手元の詳細な映像を合わせて見取っていく必要がある。
- ・配信者の意図とは関係なく、CD 音源が流れるなど著作権に関してより一層の整備が必要であることがわかった。学校においては、授業目的公衆送信補償金制度 (SARTRAS) への加入と著作権研修を充実させていく必要がある。また、安全に教育力の向上を目指していくためにも、授業研究や教員研修目的などの SARTRAS の補完的包括ライセンスの整備が必要であると考えます。

(3) メタバースの活用

360 度カメラによる授業配信後に ZOOM にて実施した授業研究会では、対面とオンライン参加者の隔絶感が強いのが課題であり、また、見取りも難しかったため、オンライン側から簡単な質問はできても、子どもの見取りを語ることは困難であった。メタバース

を活用することで、子ども主体のより多様な意見が出る授業研究会が出来ないかを検討した。今回の活用では、メタバースを大学側が用意するだけでなく、学校側が自ら空間を作成できるように事業を進めた。授業をメタバースに取り込むのではなく、メタバース自体が授業の一部となることで、より充実した研究会になると考えた。また、これらデジタル技術活用支援の報告会として、本年度 360 度カメラの活用やメタバースの活用に取り組んできた学校を集めての研究発表会をメタバース上で実施した。

メタバース活用の研究開発に関する成果と課題は、以下のとおりであった。

- ・授業資料や成果物、授業動画を展示のように複数配置できることで、情報量の多い研究会が可能になった。
- ・参加者に対する要求事項が多く(アカウントの作成、PC のスペック、マイク等の機材、操作の習得等)参加してもらいにくいのが、これらの課題をクリアするとメタバースの有効性を感じる参加者が多かった。
- ・授業配信と同時並行でメタバース上で授業検討を行うなど新しい授業研究会の在り方についての可能性を見出すことが出来た。
- ・子どもが行ってきた探究活動等の成果や過程を、子ども自身がメタバース上に表現することも可能。
(授業を公開するのではなく、公開することが授業になるなど)

3. 事業全体について

(1) 交流セッション (中間報告会)

12月22日(金)に中間報告会として交流セッションを開催した。本事業の進捗説明の後、校内研修支援カンファレンスや研修コンシェルジュに参加する学校から3名の校長、県外視察のうち3地区(沖縄、熊本、札幌)各1名計3名の指導主事、デジタル技術活用支援担当の本学教員2名からそれぞれ実践状況報告を行い、最後に参加者35名が7グループに分かれて校内研修支援とデジタル技術活用支援の情報

交換を行った。参加者からは、自身の取組をメタ認知する機会となり、今後の取組への視野が広がったなどの声があった。

(2) ラウンドテーブル (最終報告会)

2月17日(土)、18日(日)の福井大学ラウンドテーブルを最終報告会と位置づけ、県外視察先7地域から招いた計20名に参加いただいた。2月17日(土)特別フォーラム、ポスターセッション、教師教育をはじめとした学校・教育・地域を考える5つのアプローチのZoneSessions、県外視察者との意見交換会、2月18日(日)のラウンドテーブルクロスセッションにそれぞれ参加いただき、最後に「教員研修高度化モデル開発事業意見交換会」(本事業関係参加者数44名)で、本事業終了後もそれぞれの地域、学校の実践コミュニティが、互いに多重にかかわりあい成長を続けていくことについて意見交換を行った。

(3) 市町教育長会議での情報共有

福井県教育委員会主催の市町教育長会議において、5月31日(水)に本事業の概要説明と参加校募集について、11月22日(水)には事業進捗等について説明し各市町教育長の本事業への理解促進を図った。また本年5月22日(水)には事業報告を行った。

今後に向けて

○校内研修カンファレンス

参加校からは、次年度以降も校内研修支援のためのカンファレンス開催を望む声があったため、校内研修カンファレンスの継続開催に向けて関係者と協議を行い、福井県教育総合研究所、嶺南教育事務所共催、本学教職大学院は協力の形で「BESTMIX」で6月26日(水)に50名近くが参加して第1回が行われた。第2回は11月22日(金)に予定されている。

○研修コンシェルジュ

これも学校や教育委員会から継続を望む声があるために、「福井の教育コンシェルジュ」と名称を変更して継続している。皆様も是非ご参加ください。

<<https://www.chatwork.com/g/pfuzbc96f39rzo>>

○デジタル技術活用支援

本事業で購入した機器については、引き続き使用を希望する教育委員会、学校に継続して使用してもらい、その成果等について発信に努めてもらうこととした。機器の貸し出しは、昨年度使用実績のない学校からの要望にも応えている。

○事業を終えての気づきなど

(1)印象的な言葉や場面

①言葉

校内研修合同カンファレンスや記録などの参加者の言葉をいくつかを紹介させていただきたい。

- ・特に今回のカンファレンスで、決して難しいことをする必要がなく、現在行われていることを一つでもアップデートできればよいとパラダイムシフトできたことが、自分の中で成長を実感した。
- ・まずは取り組むことが大事で、「こうでなくてはいけない」と型にはめるのではなく、もし不具合があれば、その都度修正していけばよいと気付かされた。
- ・「全員一緒に」を強要するのではなく「可能な人から徐々に」という進め方をするだけでも相当な効果が生まれるのだと感じます。
- ・研修・研究の推進において大切なことは「楽しく」「みんなを巻き込んで」という部分だ。
- ・自分の言葉で生徒や教育を語る場面を増やしていきたい。
- ・360度カメラの使い道として授業配信くらいしかイメージできていなかったが、事後研の資料、自身の授業記録、クラス間交流、メタバース空間での利用など、その利用可能性について大いに示唆を得た。Mustではなく、Willの使い方を自校でも検討してみたい。

②場面

校内研修カンファレンスで取組の積極的な報告もなく、研修コンシェルジュでは皆のやり取りを閲覧していた校長先生の何名かが、第3回カンファレンスを終えてから「立派なことでもなく、半歩でも、

まずできることからやってみようと思う」との言葉を話され各校で動きを始められた。これは『コミュニティオブプラクティス』のコミュニティへの参加の度合いでいえば周辺メンバーからコアメンバー、コーディネーターになった瞬間であったと考えている。私は、時間軸を長く持つこと、様々の段階で様々な手法で様々な刺激に触れるように設計していくことの重要性を再認識した。

また、校内研修カンファレンスの後継「BESTMIX」についての話し合いの場では、教育総合研究所と嶺南教育事務所の重要メンバーが互いの組織の立場や考え方を探るようなこともなく自然に実現に向けて建設的に話し合っていた。これは所属を越えて同じ地域への県外視察に参加したことがあったからで、煙突のような縦割りではない行政組織の関係づくりを目指した県外視察の成果が出たものと考えている。

(2)「校内研修の高度化に向けてのキーワード」

①時間

校内研修やデジタル技術活用支援の事業を進める中で、必ず話題に上るのは「時間」であった。働き方改革が進む中で時間がとれないことに苦勞する学校もある一方で、校内研修やデジタル技術活用により、働き方改革が本来目指す児童生徒との時間を作っている学校もある。このような事例の情報発信、共有が大事である。

②それぞれの主体性（一律からの脱却）

今回の事業を進める中で参加者の発言や記録から、全員一律で同じように実施、あるいは結果として同じようなレベルにならないといけない、しないといけないという意識から抜け切れていない学校、教職員がいまだに多いことを再認識した。この意識が伝達型研修に頼り、その結果として教員の当事者意識を低くしている。

事業に参加した複数名の校長先生が教員の姿勢の二極化を危惧していたが、実践コミュニティの中で、目指す最上位目標を共有してベクトルの向きを同じにしながらも個々の教員がそれぞれの速さで成長することを教育委員会、そして校内で互いに認めあ

ことが大事であり、教員が主体的に学ぶことにより相似形である児童の学びも主体的になっていく。

③具体的な場面で自分の言葉で

具体的な場面を教員が自らの言葉で語る研修への転換を図り校内研修の高度化を進めた参加校がある。本学教職大学院が長年進めてきた教員が自らの当事者意識を高める省察的实践、実践と理論との往還、その先見性に時代が少しずつ追いついてきていると感じる。

(3)最後に

この事業実施期間、立派なものでないといけないと思う必要はなく、大したことはしていないという謙譲の美德は不要であること、結果ではなく経過、積

み重ねた実践が重要であることを何度も伝えた。しかし今、そのこと以上に重要だと感じるのは、実践と実践の記録を発信することである。発信しなければ伝搬せずに終わる。多様性のあるカンファレンスやオンライン技術による授業研究会などを今後も重ねる続けることで、それぞれの実践コミュニティによる多様で多重なコミュニティのネットワークが成長し、その中の一人一人の教員そして子どもたちがより成長していく。また巻き込まれるように新たな実践コミュニティが生まれネットワークに加わりネットワークも多様で多重なものになっていく。そのことに関わることができることが本学教職大学院のスタッフとしての楽しみであり矜持になるのではないかとの思いを持った。

子供の主体性・協働性と教師教育のあり方に 焦点を当てるエジプトの研修をめぐって

福井大学連合教職大学院 准教授 ヤスミン・モスタファ

急速に変化している現代社会において子どもは生き抜ける力を身につける必要があるが、それは従来の伝達的な教え方では身につかない。その教育の大事さと深刻さに気づいたエジプトは教育の根本的な改革を行い、子どもの主体性・協働性を推進し、子どもの思考力・表現力・判断力を育むカリキュラムを開発した。新カリキュラムの開発と同時に、日本の学校を象徴する特別活動(以下「特活」と記す場合もある)を導入した。しかし、特活の意味やその実践に関する知識が不足しており、新カリキュラムの取り入れ方にも不慣れのため、教員の力量形成と専門性の向上が求められた。

そこで、2016年にエジプト・アラブ共和国(以下「エジプト」と記す)と日本との間で、エジプトの若者の能力強化を目的とした教育に関する共同パートナーシップ「エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)」が締結された。このパートナーシップに基

づく人材育成事業の一つにエジプト日本型学校(EJS)の教職員の研修があり、その研修を福井大学大学院連合教職開発研究科(以下「教職大学院」と記す場合もある)が受託することとなった。2019年1月から2020年2月までの間に3バッチ(累計100人)を受け入れたが、この研修はコロナの影響で2年半停滞し、2022年9月に再開されることとなった。この研修には、「Tokkatsu + School Governance Management(学校運営)」、「Tokkatsu + Activities(技能教科等の教育活動)」、「Tokkatsu + Lesson Study(授業研究)」、「Tokkatsu + Early Childhood Education(幼児教育)」の4つのコースがあり、子供の主体的・対話的・協働的な学びを育む特別活動(以下「特活」と記す場合もある)が4つのコースに共通している(モスタファ, 2020; モスタファ, 半原, 2020)。

この研修は年に4回行われ、毎回40人もの教職員が来日し、4週間にかけて理論書や実践記録をはじめ、

実践を意味づけるための理論的な枠組みを勉強するに加え、福井大学附属義務教育学校をはじめ、様々な幼稚園、小学校、中学校を訪問し日本式教育の本質と意義と特活の理念と実践に実際に触れ、教育改革を実現するにあたって必要な力や環境等を実習的に学び、共に探究する。

コロナ後の再開以来、2022年度に3バッチ、2023年度に4バッチ、2024年度（本稿の執筆の時点で）に1バッチ、合計8バッチの累計317人のエジプト人教職員（以下「研修員」と記す場合もある）を受け入れている。今年度はさらに3回が予定されており、2026年度まで同様の実施計画で続く予定である。上記の4つのコースごとに研修の内容が多少変わるが、学校づくりや組織としての学校の役割に加え、子どもたちには質の高い教育を提供し、子どもの主体的・協働的・対話的な学びを保証するために、教員にはどのような力やコンピテンシーが必要か、そしてこの力とコンピテンシーはどうやって培っていきけるかというのが4つのコースで共通の課題である。

「学校運営」のコースでは、研修員は子どもの学びを保証するために、管理職はどんな学びの環境を作れば良いか、そしてそれをどうやって作っていきけるかということを中心に4週間にかけて協働的に探究する。管理職の仕事は、書類作成に限るものではなく、子どもと教師のための学びの場を作り、教師が継続的に学べるように必要な支援や環境を作っておくことだ、ということ講義や資料で研修員と確認し、良い学校を作るための様々な工夫やアプローチを一緒に考える。そして、実際に学校を訪問し、校長から話を伺い、自分の学校では何ができるか、どうやって学校を子どもと教員の協働的な学びの場にするかができるかをグループで考え日本人スタッフとともに協働探究する。

「授業研究」のコースでは、学校で協働する文化がないエジプトの教員は共に学び共に探究することを学ぶ。開発された新カリキュラムを取り入れる際に、従来の力だけでは足りない。従来の伝達的な教え方では先生が中心となっており、先生の話す・伝える力に重みが入っていたが、子どもを中心の学びを導入

し推進するにはそういった力が働かない。教員の力量と専門性を向上する必要がある。そこで、教員の協働性を促進し、専門職のコミュニティを築く働きがある授業研究が5年前にEJSで導入された。授業研究はEJSで導入された当初、前例もなく、説明もなかったため、様々な混乱をもたらしてしまった。その意義と価値が十分に浸透していなかったため、負担にしかならないというふうに思われていた。しかし、本研修の繰り返しと向こうの授業研究の実践の積み重ねで授業研究への理解が深まり、その意義と価値への理解が深まってきた。授業研究のコースでは、附属前期と後期をはじめ、安居中や至民中等様々な学校を訪問し、それぞれの授業研究の組織とあり方、教員の協働性とそれを支える教員の専門職コミュニティの構築と継続について考え、グループで話し合う。母校の現状を踏まえ、自分の課題を意識しながら、授業研究の改善と発展に向けての提案を探る。EJSにより授業研究の実践と展開が異なるが、それには様々な背景と理由がある。現在51校がエジプト全国に配置されているが、51校で同様の取り組みを実現することは現実的ではない。それぞれの状況と周りの地域に合ったやり方で進めることが最も大事だと研修で主張している。

「幼児教育」のコースでは、幼稚園の先生たちは「遊びを通して学ぶ」幼稚園の子どもたちの姿に注目する。エジプトと日本の教育制度が大きく異なり、幼稚園は小学校の如きアラビア語（国語）や算数、社会等の教科がある。自由遊びの時間もあるが、短い、一斉指導で終わることがほとんどである。教科の時間と内容は変えることができないが、自由遊びの時間を有効的に子どもの主体性と協働性を育む時間にするためには、どうしたら良いか、どんな環境を作ったら良いか、という疑問を持ちながら、附属幼稚園をはじめ、様々な幼稚園とこども園を訪問し、どうやって子どもたちは遊びで学んでいるか、そして先生たちはどうやってどの程度で支えてあげるかということを観察し学ぶ。

この6年でEJSが大きく発展してきたと言える。コロナのせいで研修は2年半停滞したが、この2年

半のおかげで EJS は独立できたと感じた。研修のサポートがなくなった一方で、学校が継続しているので、教員と管理職と共になんとかしなければならぬという思いでなんらかの形で試行錯誤を繰り返しながら、様々な実践に取り組んできた。これらの実践があったからこそ、研修員は附属等の実践を自分の取り組みと照らしながら、新しい発見や気づきに注目する。コロナ前の時期は学校ができたばかりだったため、アウトプットできる実践がほとんどなかった。しかし、コロナの間には工夫や苦勞しながら、様々な実践を挑戦できたため、研修は福井大学からの一方的な情報ではなく、両国の協働探究の場となった。

毎回、研修が始まるに先立って、研修員にレポートを書いてもらい、学校の現状と課題を共有してもらう。それを踏まえ、研修の内容と進め方をいろいろと調整する。そうすることにより、現況に沿った研修を提供し、研修のレベルも高めることができる。また、グローバル的な専門職学習コミュニティを構築する目的で、研修の再開以来、第3週目の水曜日に「エジプト・日本を結ぶラウンドテーブル」を開催し、元研修員とつなぐ場を設けている。このラウンドテーブルでは元研修が帰国後の実践と取り組みや直面して

いる課題について報告し、現研修員は2週間半の間に学んだことや考えたこと、気づいたことについてグループごとに報告する。現研修員は元研修員の報告を聞くと、自分も帰国後こんな素晴らしい実践ができるといいなあ、と展望を持てるし、元研修員は現研修員の報告を聞くと、自分には見えていなかったことが見えてきたなあ、と研修員の新鮮な話を聞け、新たな視点でお互いの学びがつながり、協働探究を通して視野が広がっていく。

この6年間の間に EJS は著しく発展してきた。まだまだ課題がたくさんあるが、課題がないところはない。改善する、発展する精神を持つことが最も大事である。そして、みんな同じ目標に向かって挑戦することが大事である。EJS の教員はやりたいことがたくさんあるが、カリキュラムが密集しており、柔軟性をかけているため、自由にやることには限りがある。しかし、その中で自分たちは何ができるかということと一緒に考えることが手掛かりになる。EJS の先生方はそれぞれの学校の状況を以前よりも理解しているしよく把握しているため、様々な可能性について考えられる。こちらも EJS の発展と先生方の力量形成と専門性の向上のために引き続き全力で協力していきたいと思っている。



お知らせ

Schedule

- 7/13 Sat.** 7月月間合同カンファレンス A 日程
7/20 Sat. 7月月間合同カンファレンス B 日程
7/27 以降 夏期集中講座 **Cycle1(a:7/27,28,29), (b:7/30,31,8/1)**
Cycle2(a:8/3,4,5), (b:8/6,7,8)
Cycle3(a:8/10,11,12), (b:8/19,20,21)



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。関心がある方は、dpdfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】先日「実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Session」が開催されました。大学内外からの参加者を得、フォーラムを始めとする様々なセッションでの語り合いが行われました。ラウンドテーブルとは「円卓を囲んで立場役職関係なく語り合う」という意味があるとの事。皆さんから寄せられた原稿からも、学校や様々な場面でのそのような姿を伺うことが出来ました。語り合うこと、子どもに向き合うこと、悩み、葛藤等、院生の皆さんの思いの詰まった185号になっています。(H.T.)

教職大学院 Newsletter **No.185**

2024.7.26 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdfukui@yahoo.co.jp